
東方変態医者

素晴らしい井坂深紅郎を深く紅く愛そうの会001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方変態医者

【Zコード】

Z0453M

【作者名】

素晴らしき井坂深紅郎を深く紅く愛そつの余001

【あらすじ】

ある年、晴天の日、人類は医学の要にもなるであろう人物を失つた、その名は『井坂深紅郎』彼は、人類史上、もっとも多くの人間の命を実験素材として利用し、それに比例する数のガイアメモリを己に使用してきた人物もある、この物語はそんな彼が死後にどのような生活を送ったかの物語 下記の物に嫌悪感を覚えるならば読まない事をお勧めします 格好いい井坂深紅郎 アブノーマルな井坂深紅郎 シリアス（笑）な井坂深紅郎 天然な井坂深紅郎 キヤラ崩壊 やめてくれないか！俺の嫁をそんな奴に好きにさせるのは！

2 逆に下記に当てはまる人には読むことをお勧めします 井坂先生
生 L o v e 井坂先生は知らないけど興味あるよ！ キヤラ崩壊？
感動的な、だが無意味だ

3 尚、この話を閲覧した事により嘔吐、頭痛、などの症状が起きたとして、私は一切の責任を負いません、全ては乾巧という奴の仕業なんだ

以上の事を踏まえた上で閲覧してください

服用時の注意（前書き）

初めまして、素晴らしい井坂深紅郎を深く紅く愛そつの念の0-0-1と申します、
略してイサゼロです。
今回は主人公紹介 + 注意となつております

服用時の注意

服用時の注意

閲覧時に気分が悪くなったり、頭痛がした場合は、すぐに病院で診断を受けてください（推奨病院名・井坂医院 スマートブレイン医療機関）

ちなみに、頭痛がし、頭の中から奇妙な音がする場合は頭の中にダイナマイトがある可能性があります、大人しくマンホールに身投げするか、ジユラ何とか星人の飛行船に突っ込んでください

尚、同居人が「泉君、たなびたいことがあるんだ、ちょっと。」

や「さあ、早くチャージング棒を見せてくれ。」や「だから人目に付かないここまで来たンじやないか。一回きり見せてくれれば、それで僕は満足するンだ。お願ひだから・・・ネネ、いいだろう?」や「僕、絶対しやぶらないよ。だから・・・ねえ、見せてくれるかい?」などと言い出した場合はおそらく5に達しています、焼いて処分してください

本編主人公紹介

井坂深紅郎 性別／イサカシンクロウ 歳／？ 中年半ば

照井竜（本編には関係ありません）が家族の仇として追つていた真犯人。

井坂は 1ドーパント専門の医者という裏の顔を持つ内科医である。通常1ユーヤー1メモリという2ガイアメモリの法則を無視した

複数のガイアメモリの挿入によって日々肉体を強化している怪物で、その胸には自らの身体を使ってガイアメモリの効果を試験した実験投与のための 3 生体コネクタ痕が無数に刻まれている。

それによって強化された肉体の変質によって、異常なまでの食欲をもつ大食漢でもある。

4ガイアドライバー、 5ダブルドライバーなどのガイアメモリの毒素を分解するドライバーはガイアメモリの本来もつ能力をスポーツするものとして、その存在を否定する 6アンチドライバー主義者である。よって、ガイアメモリは直挿しすることに意味があるものとして、ドライバー使用者を「7ドライバー使い」と呼び、卑下している。

1ドーパント 2のガイアメモリを使用し、超人的な能力を得た元人間の怪物、メモリをブレイクする事によって通常の人間へ戻る他、自分の意思で超人体から人間体に変わることができるが、超人体への変身はガイアメモリを使用しないと不可能

2ガイアメモリ USBのような形のドーパントへの変身アイテム、中には『地球の記憶』が記録されている

3生命コネクタ痕 PCに例えれば所謂コネクタ（そのままである）

4ガイアドライバー 仮面ライダーW本編で登場する、幹部とも呼ばれる園崎家の人間が使うドライバーで、ガイアメモリの毒素を抜く効果がある

5ダブルドライバー 仮面ライダーWの変身アイテム以上（若干投げやり気味に）

6 アンチドライバー主義 今の所井坂先生のみ

7 ドライバー使い 仮面ライダー + 幹部の人達

ウェザードーパント【WEATHER·DOPANT】

身長 249cm

体重 115kg

特色／力：強烈な日照、豪雨、落雷、竜巻、絶対零度の冷気など、あらゆる気象を增幅して技に転用する。

腰にマウントされた万能チーン武器「ウェザーマイン」を使用し、強烈な物理的攻撃も可能。

説明

井坂深紅郎がガイアメモリ「WEATHER」を使用して変身した姿。あらゆる気象を操り、通常のドーパントでは考えられない多彩な攻撃能力を持つ。「WEATHER」のメモリは園咲家が持つ8ゴールドのガイアメモリに匹敵する。9上位メモリであり、メモリケースのカラーも一般流通されたガイアメモリにはないシルバーである。ウェザードーパントの攻撃能力は異常なまでに高く、10ダブルと11アクセル、一人の12仮面ライダーが同時に攻撃を放つても13通用しないほどである。

8 ゴールドのガイアメモリ 成金メモリ

9 上位メモリ 上位だが素材が違う訳では無い

10ダブル 仮面ライダーW本編にての主人公、一人の男が合体し、変身する、通称：半分こ怪人

11アクセル 中一的な決め台詞で子供達を引き付ける程度の能

力、だが質問されれば『俺に質問するなあ！！』と叫び暴れる、しかし、井坂先生を殺害し、幾分か落ち着いたのか『俺に…質問しないでくれるかな？』と、優しく語りかけたが、結局答えないと

12仮面ライダー マスク乗り手（提供：エキサイト先生）

13通用しないほどである だが危なかつた、これは公式サイト（硬式 彩都）の能力、『敵の設定を大げさにする程度の能力』の効果である

服用時の注意（後書き）

申し訳ありません、このような駄作で
： いえ、別にふざけていた訳ではありません
すこし、アンサイクロ何とかっぽくしたくなつただけです
言わば、反逆です
(訳：次から真面目だと思いませんから許してー)

Wよ再び／変わりやすい山の天候（前書き）

キヤーイッサカサーン

コツチムイテー

Wよ再び／変わりやすい山の天候

ある年、人類は世界一の名医を失う、その名は『井坂深紅郎』
彼は、人類の進化に貢献し、偉大な成果を残した、しかし、その為
に「王の判決を言い渡す…死だ！」となり、この世を去った…
この物語は…そんな彼の死後談である

東方 変態医者

「いいんですか？そんな約束をして…僅か一%も勝てる確立が無い
と言つのに？」

「全て…振り切るぜ…！…変…身！」

「確かに速い…しかし、使う奴が虫ケラでは…」

「9・8秒、それがお前の絶望までのタイムだ」

「私への憎しみが…お前をここまで強くしたと言つのか…！？」

「ぐあつ…ぐああああ…！」

「メモリの過剰使用のツケが回つたんだ…」

「こ…これで終わつたと思うなよ…お前等の運命も仕組まれていた
んだ。シュラウドと言う女に！」

「先に…！地獄で待つてるぞおおおおお…！があああああ…！」

彼の瞼の裏には死ぬ前までの光景が染み付いていた

彼は疑問に思つた、何故、意識があるのかと

彼は疑問に思つた、何故、背中に地面の温もりを感じるのかと
そして一つの答えに辿り着いた

（生きて…いる…？）

彼がそう思い、意識が覚醒し始めると、同時に声も聞こえてきた

「…ますか？」

意識が朦朧としているのではつきりとは聞こえないが、彼は声が聞こえた事に驚いた

「生きてますか？だめだ、返事がない、ただの屍のようだ……」

その言葉を聴いた彼は、死体扱いされて、何処かに埋められたら全てが終わるので、とりあえずゆっくりと体を起こす

「…くう、…まだ生きてますよ、残念ながら」

ぼんやりする頭を横に振りながら、声の主の顔を捜す

「何だ…生きてたんですか…久しぶりの特ダネかと思つたんですけど…私の期待を返してください、三倍にして」

そう言わると、彼は何故か自分が悪い様な気がしてきた、実際は全く悪くないのだが…

「え？あ、いやー失礼？」

戸惑いながらも彼は声の主を見つけ、顔を確認する

その顔は、まだ幼さを残すが、どこか、厳格な会社員のよつた雰囲気を漂わせる顔立ちだった…

彼は、このような顔立ちの者を知っている

「…マスゴミ？」

「ちよ、人の顔を見て第一声がマスゴミ？ってどんな教育受けてるんですか？親の顔が見たいですね」

「いや、失礼、さすがにマスゴミは言ひ過ぎましたね…所で、ここは何処でしようか…？」

彼は素直に疑問に思つた事を彼女に聞いた

「はあ、なんて在り来たりな…せめて『知らない青空だ…』とか言えないんですか？」

青空は何処で見ても一緒だらう、と彼は正直に思つ、いや、山で見る青空と都会で見る青空は違うかもしれないが…

「」は『妖怪の山』です、特に用が無いのなら、さつさと下山してください、迷惑です

「妖怪…？あれですか、心靈スポットとかですか？そつが…その力

メラ…実はフェイタルフレームとかできるんでしょうか

「馬鹿ですか？幽霊は撮影してもダメージを『えられませんよ？』し

かも、ここは本当に妖怪が出ますよ？河童とか天狗とか

彼女、よくよく見れば中学生にも見えなくはない、だから彼は信じられなかつた、彼女の言つ事が…

「ハハハハ…それは興味深いですねえ…診察してみたいですね」

「む、信じてませんね、その顔は…まあ、いいです、勝手に食われるなり実験台になるなりして死んで下さい…それより…あなたの手にこんな物が握られていたんですけど、何ですか？」コレ

そういうながら、彼女の手には銀色のUSBメモリのような物があつた

「私の直感が告げるには超特ダネっぽいんですけど、コレ…なんでしたつけ？USBメモリ？」

「さて、落ち着いてそのメモリをこちらに返しなさい、今なら私は怒りません」

そういうながら、彼はメモリに手を伸ばす、しかし、彼女は軽く後ろに下がり彼の手を避ける、そして意地悪い笑みを浮かべ、メモリを左右に振る

「そんなに返して欲しいって事は…相当珍しい物なんですね？ふふふ…話すまで返しません」

普通の人間なら喋つただろう、しかし…彼、井坂深紅郎にとつて…

それは…命よりも大切な物だつた

「返してください

殺してでも、奪い取る」

井坂は即座に飛び上がり、人間とは思えないスピードとフットワークで彼女を翻弄し、飛び掛り、メモリの奪い合いに入る

「そのメモリ…私に返しなさい！」

「は、速つ！ちょ、やめてくださいって！返しますから！」

だが、半分以上発狂した、彼の耳にはその声が届かなかつた

そして、そこからさらに悲劇が起つる

「んー?」ちから声がしたよつな...」

横に広がる森の奥から一人の少女が姿を現した

左手には盾

（おかしい…現代社会的に考えても…銃社会的に考えても…何故剣と盾？それに…）

井坂が一番目を引かれた場所：それは

「何故…何故獸耳+尻尾?…コスプレイヤーの溜り場ですか…?」「む!侵入者はつ……………何やつてんだ下衆がああああああ!?」

突然叫はれた事により、井坂は現状を飲み込む
少々二両の取つ組み合ひの姿勢、何処から二

少女と井坊の甲子組み合ひの姿勢 何處からと見ても… 井坊が少
女を押し倒しているように見えるのである

「誤解ですよ」と、おじいちゃんが、おじやんの手を握りながら、おじやんの顔を覗きながら、おじやんの耳元で囁いていた。

坂は声をかけるが、 もみじ

「助けて榎！この人いきなり襲い掛かってきて……！」

「マスク」があああああー!?」

少女の演技により甘斬られた……いえ、もしかねえよ」の筆
三者視点的解説は……やはり難しい

全く困りましたね… 突然詫のわからぬ山に飛ばされると… そして何より

非常識人が多い！

「了解です射命丸さん！今すぐ三枚下ろしにしますよーーー。」畜生、単純な奴でしたね…なら仕方がない…

私は無理やり彼女の右手のメモリを取り返す、おお…この触れるた
びに感じる…温もり…違う、これは彼女の体温じゃないか…
「仕方がありませんねえ…それより、榎君…と言つたかな、君の耳

と尻尾は本物なのかねえ……？」

先程から見るに時々耳は動くし、尻尾はブンブン動いてる、たしか
…犬は興奮状態になると尻尾を振るんだったかな…

「もちろんですよ、本物じゃなきゃなんですか、こんなコスプレし
て町歩くんですか？馬鹿みたいですね」

そうなると…本物の妖怪…妖怪の山…本当だつたんですね…いやい
や…非常識すぎる…何もかもが
「なるほど…興味深いですねえ…是非、今度ゆつくり診察させても
らいますかね」

「懇切丁寧にお断りします、そちらの射命丸さんをどうぞ」

「尻尾引き抜くわよ？」

…彼女達は…仲がいいのか…？よくわからないな、まあいい…

「では…私が勝てば一人を診察、負ければ死、それで構いませんね
？」

「構いませんよ」

「いや、その取引に私が含まれる点が理解できないのですが…まあ
いいか…どうせ負けないだろうし…」

結局彼女達は了承する、それは私が『通常の人間』だと思つている
だからだろう…

（計画通り…）

計画なんてありませんけどね

「では、行かせてもらいますよ？」

そういうて、彼女はこちらに剣を振りかざしてくる、私は軽く避け、
右手のガイアメモリを強く握る

「騙して悪いが…私は人外でしてね…そう簡単には死にませんよ？」

そういうてから右手のメモリのボタンを押す

【WEATHER！】

機会音声が鳴り響き、直後に私は右耳にメモリを挿す、すると、私は、
嵐を想像させる暴風に包まれ、次に雷が私の周りに落ち、私は、
まるで風神を想像させる超人

【ウホザー・ドーパント】へと変身する

「変身能力…！？構いません、このまま押し通します！」

そういうながら、彼女は一直線にこちらに突っ込んでくる、それに私は1アクションしか取らない、右手を高く上げるという行為だそうすると、空が見る見る雷雲に包まれていき

「空が…急に暗く…やはり山は天候が変わりやすいんですかねえ…」

射命丸、と呼ばれた少女が空を見ながら、ぼやく

「ふんつ！」

私が手を下ろすと、彼女に雷撃が直撃する、妖怪とは言つても…雷撃が直撃しては…氣を失うしかないのでしょう

「うわっ…雷が直撃…？まさかこれは…」

射命丸君がこちらを驚愕の眼差しで見つめてくる

「そう、私の能力ですよ、では…約束通り…診察させて頂きますかね…」

そういうながら、私は射命丸君に一歩ずつ歩み寄る

「ア、アンフェアですよ…！卑怯者め…！」

「安心してくださいよ、卑怯もラッキヨウも大好物ですから」

ただし蟹は嫌いですけどね、あと刑事も

「わ、私にだつて拒否する権利はありますよ…？抵抗しますからね？」

「いいですよ？それなら…今度は、君が負けたら…抵抗しないでくれますかねえ？」

断れば抵抗できなくしますけどね

「…ふ、ふふふ…勝てる…私なら勝てる…自分に自身を持って射命丸 文！頑張れ頑張れ！何で諦めるんだそこで！応援してくれる人達の事も考えろよ！ネバーギブアップ！」

どうやらテンションをあげる作戦に出たようですが…

「そうか…アレですね、こういう時は…戦略的撤退が勝利ですね」「素直に逃げるが勝ちといいなさい、逃げるが勝ちと」

どうやら、友人（？）を放つて置いて逃げようとしているようですが…

ね

「うう…しゃ…酷…」

「うわあ！死体がまだ喋った！（首にストレートに蹴り）」

「こふつ…絶対来世で会つたら殺します…」

「いや、さすがに酷いだろう…それは…

「では、私は今から頭痛で苦しむ予定なので、そろそろ行きますね」

射命丸君は、こちらに笑顔を向けて逃げ出そうとしています…

「それなら丁度いい、私は一応医者の端くれです、診察しましょう」

「うわあ！大変だ！今私の祖母が死にました！帰らなくては…」

「そう言って彼女は逃げ出そうとする、まあ…別にいいかな…割と

普通の人間かも知れませんし…

「では！枕は使い終わつたら郵便受けにでも突っ込んでください！」

「どれだけ大きいんですか、その郵便受け

しかし、彼女はここで大きなミスをした、それは…

【背中から翼を生やした】

「待てえええ！！！診察させてもらいましょうーーー」

「うわあ！やつぱり反応しますか！？どうか見なかつた事にーーー」

私は彼女の言い分を無視し、彼女の上に雨を降らせる

「ちょ、こんな時に…！神は私を見放したと言つかーーー」

射命丸君は雨をとともに受け、翼が重くなつたのか、スピードが一瞬下がる、私はその瞬間を逃さず、向かい風を吹かせ、こちらに射命丸君を吹き飛ばす

「これ絶対自然風じやありませんよねーーーもつ嫌だあああああ…

「お帰りなさい、射命丸君…？」

「た…ただいま…えつと…」

「私は井坂深紅郎、と言います」

「あ…文です、射命丸文」

「ふむ…文君ですか

「では、文君」

「は、はいっ！ 何でしょうか！？」

「この辺りに小屋は無いんですかねえ……？ とりあえず梶君を治療しないと… 本気で死ぬかも知れませんよ？」

「え？ あ、ああ… そうですね！ 一刻も早く治療しなければ… あ、 そ
うだ、この近場に私の家がありますけど」

「じゃあ、そちらに移動しましょうか、案内頼みますよ」
とりあえずウエザーのまま梶君を担ぎ、歩き出す、さすがに人間体
で少女を担ぐほどの力は残つてないんでね…

少女、医者移動中…

「あ、ここです、ここ」

そういうて案内されたのは、それなりの木製の家

「ふむ… ここなら十分でしょう… といつか…」

「離して下さい！ もう歩けますから！」

「血の再生の速度が異常じゃないですか…」

抱いでいた梶君は必死に暴れていた

「…とりあえず中に」

そういうと、文君は快く中に入ってくれた、中は小さつぱりとして
いるというか… 何もないというか…

「あー私、殆ど家に居ないんで… 別に寝床があれば十分なんですね」

解説ありがとうござります

「では… 診察を始めましょうか」

「「え？」」

一人の顔から段々と血の気が薄れていいくのがわかる、私は逃がさな
いために木製のドアを絶対零度で凍りつかせ、動かないようにする
窓などの逃走経路になりそうな物も全て

「ンツフツフフ… 私が忘れるどでも？」

「あ…… あははははははは……」

「あ……あややややややや……」

私は人間体に戻り、一人に歩み寄る

「「イヤアア—————あああああ……死にたい（桜）」

以下 いろいろな関係で描写不可能（）想像にお任せしますが、大
体N i c e b o a t eが浮かんできます）

「……残念ながら事後…かと思ひきや…」

「いや…正直井坂先生の事勘違いしてましたね…」

「本當ですよ、血液摂取したり、瞳孔見たり、心拍数計ったり、体温測つたり、それだけじゃないですか……診察する、としか言つていいのに…そこまで拒否しなくても…」

「いえ…どう見ても勘違いしますつて、あの言動は」

「ああ…あれは私のマッドサイエンティスト魂に火が付いただけですよ、全く…」

正直、アレから地獄だった、一人は泣き叫ぶし、桜君は注射機見た瞬間に泣き出すし、その上、心拍数を計る、といつただけで『変態』『口つ口ン』全くもつと酷い…頸動脈に手を当てるだけなのにねえ…

心拍数＝心臓

この発想が許されるのは小学生までですよね

「…で、文君、一つ私からの純粹なお願いがあります」

「あ、はい、全裸になれ以外だつたら大抵の事はしますよ」

「は？それ…いえ、何でもありません…」

「じゃあ…私をしばらく…いえ、永遠にここに泊めさせてはくれませんかねえ？」

「……あー別にいいですよ、どの道家に夜と朝しか居ませんし…」

「文君は、アレなのだろうか、夜襲われるとか、考えないんですかね…」

「あ、変な事をすれば新聞にしてばら撒きます」

「本当にマスクだつたんですね……」

「マスク言うなー！」

おっと、つい本音が

「では……ここに住ませてもらいますかね……ちなみに、私も人里に病院を建てるつもりです」

先程文君から聞いた話では……

ここは【幻想郷】という外の世界で忘れ去られた存在が集まる場所だそうだ

……私は一つの不安がある、それは……

私の【ウェザー】のガイアメモリ、これはブレイクされたはず……だが私の手元にある……つまり……

ブレイクされたガイアメモリが流通している可能性があるならば私は病院を建てよう、そして……今度は……

ドーパント専門の医者、というのはやめて、仮面ライダーの真似事でもして見ましょうかね
どうせ……【テラー】のメモリはもう手に入りませんしね……（フフフ……何故でしょう、地味に楽しみですねえ……昔の感覚が戻ってきたのでしようか……？）

今、輝きの中で、私は

今までの罪を償えるかも知れない

Wよ再び／変わりやすい山の天候（後書き）

この話は一話完結ですが、基本的に原作と同じようつて一本完結で行きたいと思います

「力は誰にも渡すな／英雄失格、同時に死（前書き）

本編に登場する人物は黒を白に変えるカリスマ弁護士とは関係ありません

乙の力は誰にも渡すな／英雄失格、同時に死

幻想郷へ辿り着いて二日程経ちましたかね…私は人里の少し外れに『井坂医院』を建て、毎日診察をし、経営する事になりました

この三日間で気がついた事は…

？文君は壊滅的に料理ができない + 味覚が死んでいる

？文君の家に盗撮カメラ + 盗聴機…恐らく桃花君が河童から譲り受けた物でしょう

？この世界には病院が少なく、大繁盛…妖怪とか神とかが多いのであまり必要ではないのでしょうか…

？大繁盛に対しても人手が少ないので過労死寸前

…この程度でしようか…

誰か医大とか作らないんですかねえ…

…学習施設は寺小屋だけでしたね…

「…次の方どうぞ」

「悪いね、また体調が若干悪いので来たよ」

「…そういうながら入つてくる男性、…」

彼は北岡宗一…不治の病を患つてている青年です

「…まったく…何なんだかね…どうせ無駄だと思つても勝手に足が動くんだけよねえ…本当に無駄なのに」

彼は自嘲的な口調でそう言う

「仕方がありますんよ、人間なんですから、それと、出来る限り前向きに生きることをお勧めしますよ、病は気の持ちようですから」

「ははは…一応前向きに生きてるよ…」この間告白もしたし…玉砕だつたけどね

ああ、自嘲的な理由はそれですか

「…」愁傷様、まあ、病が一つ減つた事ですし、少しは気楽になつたでしょ？…一応薬は出してましょ？、しかし忘れないでください、一番大切なのは」

そういうながら私はカルテに薬品の名前を書いていく

「なあ…先生、先生はさ、人の欲望つてどう思うよ?」

宗一君が今までの自嘲的な声とは違う、鋭い声で此方に聞き返してくる

「欲望…ですか…そうですねえ…欲望に溺れる事を悪いとは言いませんが…痛い目を見るでしょうねえ…」

「やっぱり先生もそう言つのか…俺は、あれだね、欲望つてのは一種の芸術品だと思うよ、人それぞれの個性があり、更には達成する形も違う」

なるほど…一理ありますねえ…まあ、私は達成する前に死にましたが「しかし、その痛い目を境に人生がいい方向に転ぶ事もありますよ

？」

「そう、私のように

「いい方向ねえ…ああ、そろそろ時間だ、悪いね、先生、こんなどうせ死ぬ人間の相手なんかしてくれて」

「だから、前向きに考えろと…まあ、いいです」

「ははは…「めん」めん…んじや、また具合悪くなつたら来るよ」

…しばらく時間が経ち、そろそろ家に帰らうとした時…

私は後ろから威圧感、というか、何かを感じた

「…出てきたらどうですか?そこに居るんでしょう、紅魔館のお嬢さん?」

私は文君から要注意人物(?)の話を聞かされた

…紅魔館…吸血鬼の住む館

門番…は空気だそうですけど…時を操るメイド長、運命を操る永遠に幼き紅い月…そして、ありとあらゆる物を破壊する魔の妹…正直いつか乗り込もうかとは思つていましたが…まさか向こうから来るとはね…

「今日の診察の時間は終わりましたよ、また明日来て下さー」

「…仕方が無いじやない…田中は出歩けないもの…」

そういうながら、後ろに姿を現したのは、まだ十にも満たない少女、しかし、背中には自分より大きい翼があり、シルエットだけ見れば、かなり大きく見えるのだろう

病的なほど肌は色白く、赤い眼がより一層目立つて、薄い青色の髪も含めると、まるで一つの芸術品のようだ…

ああ…診察したい…

「…どんな御用ですか、あなたが人間の病院に来るなんて」

「紅魔館に妖怪が襲い掛かってきたのよ、それで、そいつが『井坂先生の言つとおりだ』って言つてね、井坂、という名前を調べた結果、あなたに辿り着いたのよ」

「…しかし…貴女が此処に来る理由にはなりませんよ、それは、並大抵の妖怪ならば紅魔館のメンバーでは軽く倒せると思つんですがねえ…」

「…異常に強いのよ、アッシュ…全く歯が立たなかつたわ…で、今は咲夜と美鈴が応戦してるけど…長くは持たないわね」

「…それで、私に対処法を聞きに来た、という事ですかね？それならば残念ながら…そんな妖怪は私は知りませんよ」

その言葉を聞き、彼女は鋭い視線を此方に向けてくる

「白々しいにも程があるわね、言わないなら……言つ氣にさせてもいいのよ？」

その直後、彼女は右手に紅い閃光で出来た槍の様な物を持つ

「怖い眼だな…はあ、本当に知らないのですがね…特徴とかあれば教えてください、思い出すかもしませんね」

「特徴が無いのが特徴よ」

「それ、納得できるようつで矛盾しますよね？特徴あるじゃないですか」

「冗談よ、確かに体が青くて…奇妙な線が体中に走つていて…あと、オレンジ色のマフラーをしていて…右手に妙な剣を持っていたわね

…？私の知識にある妖怪にそのような妖怪は居ない…

しかし…私の知る【ドーパント】には全てが当てはまる物がある

「N A Z C A …」

「ナスカ…？ 何よ、それ」

「え、ああ、いえ…失礼、まさか…本当にメモリがこの世界に送り込まれているとは…しかし、ナスカは汎子君が持っていたはず…彼女も…死んでしまったのか…」

私は思ったより冷静な自分に驚いた、熱も冷めた、という事ですかね…

「だから、ナスカって何よ？」

「…ナスカメモリ…その名の通り、ナスカの地上絵、いえ、【神秘の記憶】が記録されたメモリ…マフラーを自由自在に変化させたり、エネルギー翼に変形させたりするメモリ、膨大な量の記憶が隠されており、引き出すたびに使用者に負担が掛かって死に至らしめる、パンドラの箱」

「…用は…放つて置けば死ぬのね？」

「そうですね、中身が『人間』なら

もしも不老不死の妖怪だつたりすれば、ナスカの力を100%発揮し、それこそ最強のドーパントになるでしょうね…

「ああ、それなら大丈夫ね、妖力とか、靈力とかは感じ取れなかつたし…普通の人間ね」

それなら安心…か

「しかし、今から私がそちらに向かいましょ、あのメモリは野放しにするには危険すぎる」

「だったら行くわよ、もしかしたら咲夜が死んでいるかも知れないし」

医者&幼女移動中…

到着したのは、異常に眼に悪い真っ赤な館、紅魔館…

そして、最初に出迎えてくれた物

吹っ飛んできたナスカドーパント

「……あ？」

「……ははは……井坂……先生か……嘘じやないか……い……ほ……うこうになんか……」

ナスカドーパントの変身が解け、人間体に戻り、姿を現したのは……

「……宗一君……ですか？」

「……そうだよ……ああ……馬鹿だなあ……俺って……死ぬ前に英雄になろうなんて考えて……英雄は英雄になろうとした瞬間に失格なのに……さ」

……彼は、体が段々と風化していき……消えた

「……ナスカのメモリの一人目の犠牲者……ですか？」

私はナスカメモリに近づこうとする

その瞬間、物凄い爆音と共に目の前を一つの紅い線が走る

「！？」

「駄目だよ……？その【玩具】おもちゃは私が貰うんだから……横取りなんてさせないよ？」

幼さと狂気の混ざり合った声

私はそちらの方向を見る、

病的に白い肌、七色に発光する奇妙な翼、薄い黄色の髪、血のよう

に真つ赤な瞳

「ほう……悪魔の妹……ですか、これは状況が悪いですねえ……」

「フラン？！何やつてるのよ？！」

「お姉さま、見れば分かるでしょう？楽しそうな音がしたから出でみれば、みんなで遊んでるんだもん……私だけ仲間外れなんて……酷いよねえ？」

そういうながらも彼女は一步ずつナスカメモリへと近づく、止めなくてはいけないのだが……

手足が動かない、動かすことが出来ない

「え？？と？これを……着けて……こうかな……？【NANCA】ひや

あ？？？あ、あははは……びっくりしたあ……」

……何故でしょう、完璧にナスカメモリを使いこなせる化け物が出来

上がるうとしているの」、とても微笑ましい、つい顔が一ヤケでし
まつ

「なんてやつてこる場合じゃないんですけどね…まあ、もひ阻止は
出来ませんし…

そんな事を言つては、彼女はガイアドライバーにナスカメモリ
を挿す

すると、一等辺三角形が交差する粒子が体を包み青い騎士のよくな
姿へと変わる…身長も伸びる

だが、一つだけ違う点があった

背中から突き出している七色に光る翼…

「子供の相手は得意ではありますんが…やるだけやりまじゅう」

【WEATHER】

機会音声が鳴り響き、直後に私は右耳にメモリを挿す、すると（以
下略）

【ウーバー・ドーパント】 へと変身する

「あれ？ もしかして、私と遊んでくれるの？」

「ええ、遊びましょう、ただし…私が勝つたら診察させてもらいま
すけどねえ」

「うん？ 別にいいよ、どうせ負けないし」

「ほおう…随分と自信家なようだ…後悔しないでくださいよ？」

絶対に勝てないゲーム、それに勝利するには切札を使うしかない
ジョーカー

Ζの力は誰にも渡すな／アンノーン・キリヒロ・イット・カム・バック（前書き）

冴子さん本編でナスカっちゃつたよーー。
まあ、いいか..

「この力は誰にも渡すな／アンノーン・キリヒコ・イット・カム・バック

「これは非常に不味い状況よね？」

「ええ、勿論、私でも勝てるかどうかわかりませんねえ……吸血鬼のドーパントなど……」

私達の目線には体の調子を確かめているナスカ・ドーパント、いや、悪魔の妹……

「ところで……お嬢さん方、いえ、レミリア君……正直言つて……逃げてもいいですかね？」

「却下よ」

……さて、どうした物か……私が肉体強化を繰り返し、今ではテラーと対等に戦えると言つても……

正直、力を100%発揮できるナスカなど……人間では不可能、よつて未知数、

ただ一つ分かるのは……

テラーなど今のナスカの前では貧弱な人間一人の戦闘力にも満たない、という事

しかし、相手が吸血鬼なら……

「レミリア君、夜明けまで何時ですか？」

「……あと三十分で日が昇るわね」

三十分……持ちこたえられるでしょうか……？

「ん、着心地はそれなり……かな？」

向こう側で調子を確かめていた悪魔の妹……いや、フラン君が此方に向かつて来る

「では……外に出ましょうか、ここでは十分に戦えません

私は即座に横の窓から外へ出る……弁償？知りませんよ

……ナスカ&・ウェザ―移動中

「あ～あ、いけないんだ～ 窓割っちゃあ…」

降り立つたナスカがそんな事を言つてくる、その姿に反して幼い声が不気味だ

しかし…それにしても…ナスカとは…なんと魅力的な…！殺してでも奪い取る…

「いやー失礼、しかし中で戦えばもつと物を壊しますよ?」

「…私のほうがもつと物を壊すよ?」

彼女が若干自嘲気味に言う…

直挿ししたら一瞬でメモリの毒素にやられそうですねえ…

「ああもう！暗い気分になっちゃつたじゃない！責任取つてよね…」
そういうながら、彼女はマフラーを変化させ、翼を作る…オレンジ色の希望の色

違う、所々嫌気を感じる毒々しい紫色が混じつている、いや、全てその色だ…！？

ナスカの色が…赤くなっている…？金やオレンジだった部分は白、青の部分は赤へ

まさか…あれがレベル3…！？…素晴らしい…素晴らしい…ナスカメモリ…！

「その肉体は魅力的だなあ…無限の可能性に満ち溢れている…！」

「気持ち悪い事言わないでよ、…行くよ?」

赤いナスカ…ナスカ・スカーレットとも呼びましょうか、略してナスカ

ナスカが剣を振りかざし襲い掛かつてくる、単調だが、確實に急所を狙つた攻撃…

だが、

「所詮そんなものですか…正直、失望しましたよ

これなら楽に行けるかも知れませんね（ フラグ1 ）

そうだ…帰つたら文君に食事を作らなくては…（ フラグ2 ）

私…この戦いが終わつたら…吸血鬼を診察するんだ…（ フラグ3 ）

「あまり甘く見ないほうがいいかもよ?」

ナスカがそういうと、あたり一面に赤いエネルギー弾が乱射される…
なるほど、これも人間には無理な話だ

レベル2の超高速、あれは人間の五感が追いつかず、死に至る
そして今度のエネルギー弾連射、これは全て一個人が操作するので
脳が焼ききれ、死に至る

だが…普段から高速で動き回り、大量の弾を連射していれば…?
まさに…赤子の手を捻るより簡単にできるだろう…だが…

「正直、君の場合使わないほうが強かつたかもしませんねえ？」
強すぎる力に新たに力を加えると、力が限界を超え、0に戻る事が
ある

簡単に考えれば、昔のゲームなどで、所持金が限界を超えると0に
戻るのと同じです

彼女の『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』それは既に限界
に達していた

そこに新しくナスカメモリの『神秘の記憶』という強力な力を加え
た、

それならまだ限界に達しなかつたかも知れない、しかし…彼女はナ
スカメモリの力を100%引き出した、それにより…彼女の力はゼ
ロ+ナスカの力に抑えられた、ゼロに戻せば、ただ単に弱点の多い
子供

正直助かつた…限界点を超えないければ三秒でも持つかどうか…

「何で…? 何時もより力が出ない…!」

彼女の足はふら付き、剣を持つ手も震えている

「おや…朝日が見えてきましたねえ…」

徐々に明るくなる一面

「つ…? …卑怯者…!」

「おや、この遊びにルールがあつたとは…知りませんでしたねえ…」

私は軽く笑いながら言い放つ

「絶対殺す…あれ…? 体が…動かな…? !」

「ん? 不調ですねえ、診察しま…冗談を言つて…いる場合じゃないな

…早く館の中に運びこまなくては…」

…様子がおかしい、日光が当たっているのに、まったく変化がない…違う、変化はある…

赤が再び青へ戻っている、七色の羽は消え、毒々しい色の羽はオレンジ色へ

「ナスカメモリが…超人体のまま…フランデールと分離している…！」

分離したナスカはフラン君を割れた窓から中に入れ、戻ってくる
「ふむ…君は…最近冴子に付き纏つている医者だな…？」

「…つ…？意識がある…？」

「とりあえず、君の勘違いを解いて置いて置こう、まず最初に…先ほどのエネルギー弾の連射はレベル3ではない、レベル3は自分の能力を底上げするだけだ」

「…聞いてもいない説明を懇切丁寧にありがとうございます」

「それと、赤いのは別にレベル3ではないよ、シャ専用…とのに近いね、能力は同じだけど」

「いや、別に何も聞いてな」

「何？冴子と私の出会いが聞きたいって？フッ…いいだろ？あれは雪が降り積もる冬の事だつた…」

「だから聞」

「私は…一日の販売ノルマの五倍のメモリを売りさばき、幹部から大事な話があると言われ…」

「だから」

「そこで出会つたのが冴子だつた…雪に混じる彼女の姿は…力強く、冷徹で、何者も寄せ付けない美しさを持ち…」

「だ」

「そんな彼女が私に心を許す姿を見て私は一気に恋に落ちた…」

「人の話を聞けえつ…！」

「何だコイツは…人の話をまるで聞かない…」

「おつと、話し込んでしまつたね、お察しの通り、霧彦です」

（きりひこ）

「誰ですか……ああ、冴子君の旦那が……いやな、事件だつたね……まだ冴子君の死体が見つかってないんだろう?」

「は……何を……」

「ナスカメモリは彼女が君を殺した後一時も離さず持つていたんですよ、それが、今はここにある、つまり……彼女は死んだ」
「は……はは……君は何を言つているんだ……? 冴子が死んだ……? ……まあ……いいか、彼女については吹つ切れたしね、今すぐ首を左右に振つてもいい、園崎霧彦そのねじき きりひこ……いや須藤霧彦すどう きりひこも吹——つ——切——れ——た」
「しかし、彼は……精神体のドーパントにしては異常だ、喋つてゐる辺りが

「……その顔は、私の性質がわからない、といった感じだね……? アンノーン……Unknow……正体不明、いい響きじゃないか?」

「失礼、私はこれでもドーパントについて研究してましてねえ……はつきりしない者、気になる物は、はつきりさせたいんですよ……どのよつたな手を使つても、たとえ死者が出てもね……?」

「腐つた典型的な人間だな……まあ、いい、私は……冴子に殺され、メモリに残留思念だけが残つた……そして、この世界に現れ、残留思念が強くなり、さらに、一時期とはいえ、吸血鬼と一体化した(?)……性的な意味)……そして、実態を持つに至つた訳さ」
なるほど……理解できない

「ついでに言えれば……君と戦う気もない」

そういうながら、ナスカは変身を解く

凛とした表情、整つた肉体、それはまさに肉体美を体現していた……
ただ

「全裸ですよ」

「…………私は紅魔館に住もうと思つんだ」

「全力で拒否するわ」

窓から見ていたレミリア君が顔を真つ青にして言つ

「ええ……いいじやない、お姉さま、結構イケメンだし、面白そつよ?」

「何よ、フラン、私に逆らうの？」

「逆らうわよ、だつて、吸血鬼だもの」

「煩いわね、妹のクセに」

「何よ、年増の口リババア

「む…引きこもり！」

「何よすぐにはライラして…だからお姉さまは子供なのよ

「煩いわね！…アンタのが五歳年下よ！」

「年で考える辺りが子供っぽいわね」

「うるさい！…うるさい！…うるさい！…私は大人よ！…？」

「大人ってのは…大人になろうとした瞬間に大人失格なのよね

「殺してやる！殺してやるから動くんじやないわよ！…？」

「騒がないの、お姉さま、見つとも無いわ」

「殺してやる…！…フラン、姉の意地を見せてあげるわ…！」

「ああ！…お嬢様が妹様に馬乗りに…！私も参戦します！」

… とても話ができる状態ではない…

「どうするんですか？話ができる状態では…」

霧彦君の姿を見る、すると…いつの間にか真っ黒なスースに一点だ

け血の染まったように赤い白いスカーフ

「…日本国旗？…それより、何処から…」

「神秘の力だよ、では…私はここら辺で…」

結局霧彦君は紅魔館に住むことになつた…どうやら、メイド長との愛称が悪いらしい…

須藤…雅史？ちがう、須藤霧彦君、ナスカメモリの所持者すどう きりひこ

…彼は私のようにメモリを集めて回るそうだ、これでは…まるで…

憎い風都ふうとの仮面ライダーみたいじやないか…

まあいいか、次回あたり寺小屋が襲われそうなんだが…ん？次回

？

2の力は誰にも渡すな／アンノーン・キリヒロ・イット・カム・バック（後書き）

なぜ尻彦さん…霧彦さんを紅魔館メンバーに加えたかだつて…？
霧彦さんは口リ&a mp;ショタ「」だくうわなにするやめ「」あ

wせd rft g yふじ」」p

…なぜ殺たし…

フルパワー／＼騒がしい朝食（前書き）

「加頭順どうして私を助けるの？」

「好きだからですよ。貴女が」

「こんな心のこもってない告白は初めてだわ」

「……（カラソ）」

このシーンで順君に萌えてしまった私はおかしいのか、否、正常だ
『じゅん』といえば

SIRENの『神代淳』を思い出します、私だけでしょうか
そして『神代淳』といえばSIREN・NTの『犀賀省吾』…彼の
言葉には興奮を覚えましたね

「俺はダンテではない、ベアトリーチェの導きは期待できない…」

そして犀賀先生と言えば、『宮田司郎』彼を思い出しますねえ…ネ

イルハンマー片手に、恋人の妹を殺して

「やっぱり姉妹だなあ！死に顔もよく似ているよー」

とか言い出すあの人…そして先生と言えば…もちろん

井坂先生イイー！…井坂先生のアブノーマルつぱりは世界一イイイ
ーツー！

フルパワー／＼騒がしい朝食

とある朝、多くの者にとつて、それは突然に起きた
「……いろいろと聞きたい事はあるんですけどねえ……まあ、何故桜
君が此処に……？」

「突撃、知り合いで朝ごはんって事でお願いします」

朝起きて、さあ、料理作るぞーとか意気込んでいる私の前には、まだ寝ている文君に何かの薬を注入しようとしている桜君の姿があつた……

「……なんですか？その薬……」

「媚薬です」

わからない、何故、此処でその薬の名前が出てくるのかわからない
「何に使うんですか……？」

「射命丸さんに打ち込んで人里に置き去りにして、無様な姿を笑います」

「ええ？」

「男共に集られて襲われる射命丸さん……ウフフ……アハハハハハ！」

「駄目だこの白狼天狗……早く何とかしないと……」

「さて、桜、ちょっと表に出る」

「うわ射命丸さん、起きてたんですね……お、おはようござりますー！」

（十分ほどありがた〜お詫（肉体言語））

「右手が……私の右手がああああ……！」

帰つてきた桜君の右手の間接は逆に曲がつていきました……一体……何を……

「……桜つてさ、キャラ固まつてないよね」

「確かに……そうですねえ……」

「え？あ？それってあれですか？語尾に『にやあ』とか付けろと言つてるんですか？」

誰もそうとは言つてないんですけどねえ……

「馬鹿馬鹿しい… そんなのイタイだけじゃないですか、全く… あ、それともあれですか？ 自分の事わっち、つて呼べと？ くれない？ をくじやれ？ と言えと？ 馬鹿ですか？ 」の戯けが

若干暴走気味ですね

「どうか、『藍しやね～』って呼ばれて『ちえええええええええええんーー』って叫ぶとか…騒々しい上にイタイ…最低じやないですか、正直首吊つて欲しいですね」

「（… 桜君はいつも）んな感じなんですか？」

発情：？別にどうでもいいですか

「私の愛を否定するなああああああッ！！」

「貴女は妖怪の山主権領域を犯して います。
速やかに撤去して下さ
い。 さもなければ実力で排除します」

一
二

「アシタニカニ體のハナダニ」

「貴様には墓の下がお似合いだ」

「どうしても… 戰うしかないのですね…」

「だからラインアーケに帰れと……もういいです、文君朝食にしまし

卷之二

隣で戦いあつてゐる桜君と九尾の狐

「アスラアアアアアアアアン！！」

モード・色彩と構成

「違う！私はキラなんかじゃない！信じてくれよ！」

「いいえ、藍君、あなたはキラです！」

死ノート…

「ええい！大人しくしろ！」この媚薬を打ち込んで人里に全裸で放してやる！！男共のエサになるがいい！！」

「くつ、離せ！こいつ…何故こんなに強い…！？」

「理由知っていますか？文君」

「知りません」

なんかドライだな…

「やめろー！藍しゃまに何をするー！」

「橙！だめだ！こっちに来るな！」

次に出てくるのは化け猫……あれ…九尾？…！…私は何をやつているんだ…！！のんびりと朝食を取つている場合じゃない…！…血液サンプルだけでも取らなくては…！…

「少し、診察してきますかね…」

「（井坂先生つて…口リコンなんですかね…）」

「何か言いましたか？」

「イ、イエ！ナルボ！」

「後でじっくり診察させてもらいます」

「ウ、ウエエエ！？」

「オンドウル化しても無駄ですよ、聞き取れますから」

「ウゾダンドコドーン！」

「文君も若干おかしいですねえ…情緒不安定と言つか…そもそも、私の五感が鈍っているのも…
まさか…毒？」

…診察の後でいいか

「うわつ！？」

「ふふふふ…大人しくしないと…少々痛いですよ？」

「井坂先生！ナイス援護！」

「む、無理無理無理！そんなに太いの入らないよお…（注射針の事です）」

「大丈夫ですよ、多少血が出るかも知れませんがねえ…（初めて

でないとも出ます）」

「き、貴様あああああ！－ 橙に何やつて…！くつ…！離せ！」

私は、化け猫を押さえ込み、無理やり（注射針を）刺す

「い、痛い痛い痛い！（血管注射なのでそこまで痛くありません）

「ちええええええええごふつ！？ふ、打つたな！親父にも打たれた事が無いのにーつ！」

「あなた、親父居ないでしょう…」

「騒がしいなあ…だがそれがいい

（しばらくの戦闘の後、桜君がリンチされ、終了、私は人里へ）

「…すごい毒ですねえ…人里が原点でしたか…」

人里へ付くと、思わず朝食を戻しそうになつた…物凄い毒が充満していた

「何があつたんですか…？これは…」

「い、井坂先生か…！毒を振りまく妖怪が突然里に下りてきて…！なんか…先生が探ししている『ガイアメモリ』つて奴を使って…！先生と同じように変身して…！その結果がこうだよ！」

「そうでしたか…メモリは…『VIRUS』バイラス…」

有機物、無機物すべてに感染し、意のままに操り、瞬時に死に至らしめる。又は、同効果のウイルスの散布。長い舌を使用しての拘束、攻撃。細菌粒子化しての瞬間移動など、強力な能力をいくつも持つ強力なドーパント…

しかし、今の所、死者が出ていない所…

ちなみに、私がウェザーに変身出来る事は人里の人は八割方知っています、たまに来る妖怪を撃退してますしね

「とりあえず…このウイルスにかかつた人間はバイラスの所持者の意のままのタイミングで殺される…所持者がその事に気が付く前に対処しなくては…」

ならばまずは簡単… 上白沢慧音君に頼んで人を隠してもらいましょうかね… さすがにバイラスとは言え… 歴史上隠された人間を殺すことなど… 不可能でしょう

そうと決まれば… まずは… 寺小屋へ

中年移動中…

たどり着いた寺小屋、中から物凄い殺氣を感じるのですが… 気のせい

「慧音君、居ま（シユ「ゴッ）」っと… 危ないですねぇ…」

突然頬を炎が掠つた

「誰だ… ? この毒をばら撒いた奴か… ?」

「違いますよ、慧音君に用事があるんですよ

彼女は確か… 藤原妹紅君…

不老不死というどう考えても薬物投与人体実験の為だけに生まれてきた最高の実験動物…

おっと、本音が…

「この毒は… ばら撒いた本人が感染者を殺そうと思えば一瞬で殺す事が可能ですが、だからその前に、人々を隠して欲しいのですが…」

「無理だ、慧音は… 慧音は… 今では息をする事さえやつとだ…」

「… 何故？」

「寺小屋を襲つた妖怪の毒を生徒達を庇つて全部受けたんだ…」

なるほど… 彼女らしいな…

「クソッ… ! 私は何もできなかつた… このやり場の無い怒りをどうすればいい… ?」

彼女は壁を拳で強く叩き、歯軋りをし、物凄い形相で空中を見つめている…

やはり… おかしい、朝から思うが… 精神的に異常を犯している人間が多い… これも毒か… ?

違う… これはそんな物じやない…

まあ、これの解明は後回し、先にバイラスを潰さなくては…
「簡単ですよ、犯人を潰せばいい、…今、里に下りてきたようですね？」

後ろで響き渡る悲鳴、…！？…へ、平衡感覚がぶれて…！？

「…！？大丈夫か…？私が行く、お前は休んでるといいさ…どの道、
来ても戦えないんだ」

そういう、彼女は寺小屋を出て行く、私は、即座に右のポケットからウェザーを取り出し、右耳のコネクタに挿す

【WEATHER】

ウェザーに変身すると、今までの不調が嘘のように消えていく

「……なるほど、この精神に異常をもたらす毒が分かりましたよ…
犯人は…最初から毒を使える存在、そしてバイラス…ならば…これ
は…【バイラスの毒素を放出した毒】…考える物ですねえ…メモリ
の毒素を自分の能力の毒と組み合わせて放出するとは…」
とりあえず私は思う、このバイラスのメモリの所持者は…

逸材である、と

ならば…捕まえて…死ぬまで実験を繰り返すだけです、使える素材
は使い込む、これが私の中での常識

フルパワー／＼騒がしい朝食（後書き）

バイラス…正直チートですよね、ひとつ街をアウトブレイクさせ、死の街に変えるって…バイオか！

フルパワー／／細菌消毒には地獄の炎を（前書き）

足りない…………井坂先生への信仰が……っ――！

フルパワー／＼細菌消毒には地獄の炎を

外に出れば、緑色の醜い怪物…いえ、素晴らしい肉体…ナスカは手に入れ損ねたが…今度こそは…！

「ほおう…あらが肉体が変化したバイラス…素晴らしい毒の濃度だあ…！…無限の可能性に満ち溢れている…！」

「…その言動は…医者だな？」

妹紅君が怖い目でこちらを見てくる…しかし、彼女も随分散布された毒気にやられているな…普段は女言葉なのに、男言葉になつている…確かに…殺意を余程覚えたときにしかならなかつた気がするなあ…

「そうですよ、清く正しい井坂深紅郎ですよ」

文君の真似をしてみる、私も随分毒気にやられてますねえ…さつさと片付けなくては…

「本当に凄い毒ね…これなら世界征服も狙えるわ！」
見た目に反して幼い…以下略、この世界のドーパントは反する奴しか居ないだろ？…

「毒物バカが居ますねえ…ホルマリン漬けにして飾りたいですね」

「む、その声は…噂の変態医者…！」

噂になつていたんですね…変態医者？

「変態医者とは失礼な…」

「だつて、新聞に書いてあるし、変態医者って」

八割方文君でしきう、後で口の中にホルマリン漬けにしてた肝臓でも打ち込みますかね？持つてませんけど

「妹紅君、焼き尽くすんだ、今すぐに」

まあ…その記事を読んだ人物を全て片付ければ解決、という事で…

「言われなくともそのつもりだ…細胞の一つさえ残す物か…！」

彼女は右手に炎を集める、いや…凄い熱気ですねえ…周りの細菌がどんどん死滅していくのが分かる…

というより、バイラス自体… 戦闘能力は無いに等しい…
ので、二の一撃で枕邊で しまふ、しか そなは 私も

ので、この一撃で沈むでしょう、しかし…それは…私も手を加えなくては…一…一…このいつ時つてのは、力を合わせるものでしょう?

「炎を圧縮圧縮ウ」

駄目だ、隣の妹紅さんぶつ飛んでますね、脳のネジが……

「アーニー、私共參謀してやる」

「妹紅君、此処は展開的に合体技でもやるべきでしょ！」

「それもそうね」

女言葉に戻っている…！！落ち着いたのか？落ち着いたと見せかけ
てまだ怒りは収まつてない、とかだと洒落になりません…

「では…私の『晴れ』による熱線と、貴女のフジヤマヴォルケイノ

「だが断る、この藤原妹紅が最も好きな事の一つは自分より強い
ふじわら

強い？お前、私より強いか？」

いや、知りませんよ、……不死より強い奴は居ないんじゃないで

「ええ……じゃあ、ＺＯＨで言えないじゃないか……」

「ですねえ…」

「じゃあ、あまり無理の無いよつた感じで…」

彼女はそういうながら、スペルカード…でしたうけね、まあ、スペルカードを取り出す、「…」…でも何でもないのだが、スペル

ルカードを何も言わずに発動していいんですけどねぇ……

「行くよー!? 無理が無いようにねー!? お願いだから!」

既興で作るスヘルカリト不安ですねえ…一人で意思をあわせれば…

？右手にスペルカード…… そんな「都合主義な」まるで「世界

の破壊者みたいじゃないですか

「……？ 私、こんなスペルカード持つてたっけな……？ まあ、いいや、

これを使えつて事だろ、大体分かつてる

もやし…違う妹紅君がそういうながら、一枚のスペルカードを取り出す、まあ…ご都合仕様でなんとかなりますかね

「『獄炎』超自然発火 - 滅び行くソドムへのレクイエム -』…！…長ツ…！名前長いつ！」いい響きだ…無限の可能性に満ち溢れている…」

直後、バイラス…ドーパントを急に炎が包み込み、動きを封じる…おかしい、わざと攻撃を受けているようだ…

直後に空が晴れ、太陽が現れ、その光を浴びたバイラスドーパントは十字の形に体を固定され、

太陽から青白く、虹色で、尚且つ赤い、というか見る角度で色が違う光線が、放たれ、バイラスドーパントを焼き尽くす…

そうか…分かつたぞ？！奴の狙いが…！メモリがブレイクされた時、使用者に多大な毒素を植え付ける、その毒素をさらに散布する気が…！

フフフ…その作戦は失敗ですね…なぜなら、この攻撃ではメモリブレイク出来ない

「わ、私のメモリがつ…なんてね…計画通り…！」

畜生、メモリブレイクの効果が付属していたのか…つ…彼女…の周りにどす黒いオーラが纏わり付き、一斉に村に放たれる

まず最初の犠牲者は…妹紅君…

「ヒヤ…ヒヤハハハハハ…！私の火力は幻想郷一イイイーツ…！…精神崩壊してやがる…！」

『弾幕はあ…パワーだぜええ…！』

「（…OMO）…ウワアアアアアア（…もこたんです）」

今、一瞬ビビリのライダーの顔が見えたようだ…

…というより妹紅君が、空より降り注いだ光線に消し飛ばされた…早くしないと…死亡者が急上昇する……！

「リイザレクショオオオオンツツ…！私の再生力も幻想郷一イイイイ…ツ…！」

最高にハイになつてゐる…！普通の人間なら別にかまわないが、こ
こら辺は普通な奴が居ないから…

『最高にハイつて奴ね！アハハ！アハハハハ…！』

『デデデデストローラー ナナナナインボー』

？だからナインボール…違う、ええ、メモリの毒素を中和なんて聞
いたことも無い！どうしろと…？

『ヒ…ヒヤヒヤヒヤヒヤ…！…ネタだあ…！…ネタが溢れ返るほど
お…！』

文君…ツ…！

『駄目だ…鬱だ死のう…九尾に喧嘩売つて生き残れるはずが無い…』

も、桜君は鬱の方向に毒素が回つてゐる…

『ちええええええええええ…！…げほ…ええええええええ…！…』

九尾の狐が吠えている…

「お困りの様だね？名医君」

その声は…

「…霧彦君ですか…一体何の用ですか？」

「フフフ…今、この人里は、精神状態が異常に高ぶつてたり、落ち
込んでいたりで、滅茶苦茶だ…だが…精神の状態を操作出来れば…

！頼むよ！プリズムリバー三姉妹！」

ええと…確かに鬱、躁、幻想の音をそれぞれ表す…だつたかな…あ、
最後のは要りませんが…

「そう！彼女達の力で精神状態を落ち着かせるんだ…！…あたいつた
ら天才なんだか…危ない、そろそろ私も毒素にやられてきたようだ
…ふう、落ち着け霧彦、ここはアラスカだ…」

アラスカ？

その後、彼女達の素晴らしい演奏と私の健康診断により、人里は昔
よりも多少おかしいけど元に戻つたとか…唯一の被害者は、テンショ
ンが上がりまくつて全裸で暴れだした妹紅君だつた…

所謂『シンゴー！シンゴー！』状態だった、それと…焼き鳥となつ
た哀れな鴉天狗…恐らく文君…でしょう、外見では分からぬほど

ボロボロになつている、全裸の写真でも取つたのでしょうか…
あと、博麗の巫女が妙な神を拝み始めたとか…『トモダチ』とか
言いましたかね…
細菌つながりですか…
ウイルス
…バイラス所持者は消えていた、メモリの発信源を聞きたかつたの
ですがねえ…

フルパワー／＼細菌消毒には地獄の炎を（後書き）

次回、感動の最終回（嘘）！

射命丸と…井坂の恋は無事にゴールインできるのか…？（大嘘）
霧彦はルーミアと一緒に化したスキマババアを倒すことが出来るのか
！？（大嘘）

そして…レミリアが子供か大人かで判断を苦しむ霧彦の決断とは…！
？（割と嘘）

次回 東方恋愛劇 最終回

『ナインボールゲームの末に…』

放送枠延長で、何と2時間スペシャル！一番組の最後には『ナスカメモリ（本物）』を抽選でプレゼントするメモリプレゼントコーナーの応募方法が載つてゐるぞ！絶対みのがしゃすみません

時々活動報告で短編小説を書いている事があります、本編が更新されなかつた時はそちらをご覧ください

惹かれるʌノ逃げるメモリ群（前書き）

核融合を操る程度の能力って、井坂先生の格好の的じゃないか…
天候に核融合操れれば井坂先生も満足だるひに…

惹かれるʌノ逃げるメモリ群

少し幻想郷を離れて風都にある私立探偵事務所にて…

目を擦りながらゆっくりと体を起こす青年、自称ハードボイルド（笑）探偵、左翔太郎

彼は起きた時に一つの疑問を感じた、肌身離さず持つているはずの物が無い

「…？…おいおい「冗談だろ…？…ハハハ…」

彼は目的の物が閉まってありそうな場所を全て探すが、見当たらない

「…ハハ…メモリがねえ…」

彼の表情は凍りつき、だんだん青白くなり、自分の相棒である、フイリップ・マーロウの名前から取った名前を持つ、自他共認める超天才、フイリップの元へ急ぐ

「「おいフィリップ（翔太郎）…！メモリがねえ（無い）よ…！」

全く同じ会話が飛ぶ

少し落ち着いて、状況確認

「ドライバーはある…無いのは、サイクロン、ヒート、ルナ、ジョーカー、メタル、トリガー…」

「それにファングも無い…エクストリームは分からないな…」

「ギジメモリはあるんだろ…？一体なんだよ…？」

「…幹部の仕業かも知れない、園崎若菜…姉さんにはこの事務所の場所はバレている」

「そんな…完全防備だつたはずだぜ？」

「ゾーン、ああいう空間操作系のメモリなら…」

「…なるほどな…」

彼らが異常事態に頭を悩ませていると、事務所のドアが開いた、そこに居るのは赤い皮ジャンを着た刑事、照井竜だ

「…左、俺のメモリを知らないか？」

「「お前（君）もかつ！（…）」」

そして、刑事に事情説明

「…なるほどな… 一体何が起きてるのか… ドーパントが現れないのを願うだけだな…」

「ああ、そうだね… ところで、照井竜、この間のケツアコルトスの過剰適合者の彼女とのその後はどうなったんだい？」

「俺に… 質問するな…！」

一方、幹部と呼ばれた者達は…

「お父様、どの工場のラインからも、この家の倉庫からも… ガイアメモリが一つも見つかりませんわ…」

「…ふむ、異常事態、… 一体何処の誰が犯人なのかな… 知らないか？八雲紫！居るんだろう！」

お父様、と言われた園咲琉兵衛は声を上げる、すると、空間に奇妙な隙間が開き、中から紫と白の現代的な服とは全く言えず、民族衣装と言うにも若干厳しい奇妙な服を着た金髪の女性が現れた（女性であつて、少女ではない、これが示す事… おや、誰か来たようだ…）

「…！」

「はつはつはつは… そう身構えるな若菜、貴重なお客さんだ」

身構える園咲家次女、園咲 若菜^{わかな}が身構えるが、琉兵衛はまるで子供を落ち着かせるようなゆっくりとした声で、言い聞かせる

「…八雲紫、一体何が目的なのかね？」

そして、次に琉兵衛が放つ言葉は恐怖の象徴と言つてもいい程の声で隙間から半身だけ出している女性女性であ… 誰か来たようだ… 紫に話し掛ける

「あら、私は貴方が面白そうな物を持っていたから少し拝借しただ

けですわ」

しかし、全く恐怖を感じないといった様子で、紫は薄く笑い、言つ

「何処でガイアメモリの存在を知つた?」

「井坂深紅郎と言つ医者からの情報源、といつより、監視している
内に見つけただけですけどね」

「…また井坂君か…彼は私にどれだけ…いや、この園咲家にどれだけ迷惑を掛ければ気が済むのかね…」

「私は最初から気に入りませんでしたわ、あの男…」
もはや、園咲家にとつて井坂深紅郎は、家族をバラバラに引き裂いた悪魔のような物である

「悪い事は言わない、ガイアメモリを返したまえ」

再び琉兵衛は言つが、紫は薄笑いから表情を全く変えず、言い放つ
「悪いのですけど…お断りしますわ、あの道具…中々妖怪と絡み合
うと面白いんですよ?」

「面白い…か」

「それに、此方の世界にはそちらの世界で壊されたメモリが流れ着
いてるんですよ?」

「ほう…」

「飽きたら、壊されたメモリも含めて全てお返ししますわ、それで
勘弁を」

「…いいだろう、若菜、全てのラインにメモリの製造を作れと命令
を出してくれ」

「しかし…此方に利益が無いのでは…」

「利益ならありますわよ?此方でしか手に入らない妖怪の情報をお
伝えしますわ」

「と、言つ事だ、若菜」

「…分かりましたわ…」

そして、話の舞台は幻想郷へ…

「……」

「……」

状況を説明しましょ、毒素が抜けなかつた、というより面白いの
で抜かなかつた桜君が寝起きの文君を襲うという行事を済ませ、さ
あ朝食だ！という時に、急に隙間が開いて、テーブルの上の朝食を
全部押しのけて、ハ雲紫、スキマ妖怪が現れ、朝食が無駄になると
いうイベントを終え、尚且つ、ガイアメモリ全部持つてきちつた
と言われた、という事です

「……ちよ……朝食が……最近朝食を取り始めた所為で朝食を取らないと
何時もの二分の一の力しか出せないと言つたのに……」

落ち込む文君、実は彼女の朝食には……いえ、何でもありません
そしてスキマに消える紫君……どうした物か……とりあえず……病院に行
くか……

医者移動中……

……道中、妙な物を見つけました……

「……ええー……」

首を吊る妹紅君、というか既にぶら下がつていい
だけど死ない……

「……あ、井坂先生、助けてくれないかな、気が動転して首を吊つ
たけど、死ねず、降りれないのよ」

……知りませんよ……全裸になつたの自分じゃないですか……

「……おおつと、もうこんな時間ですか……急がないと……」

「待て！無視するな！」

横から怒号が聞こえきますが……見なかつた事に、聞かなかつた事
に……

医者、再び移動中……

そして、さらに面白い物を見つけました

：放射能を撒き散らしながら… いえ、撒き散らしてはいませんが… 微かに感じますね…

まあ、白いマントを羽織つて、胸に赤い球みたいなのを付けて、左足は黒に水色っぽいブーツっぽい物、右足には白のブーツっぽい物、右手にオンバシラ…違うか…ロツクバスター？違うな…

「カオス…今までで一番カオスな服装ですね…」

とりあえず、脳が追いかかない…

しかも微かに放射能を感じるあたり…かなり危ない人物でしょう…

「…名医君、あれが何か分かるかい？」

いつの間にか隣に霧彦君が…しかし、ナスカに変身している…

「分かりませんねえ…此方に接近している、という事意外は…」

「あれは靈鳥路 空…核融合を操る程度の能力の持ち主さ」

核融合を操る程度の能力…！…それをメモリに適応し、さらに過剰適合者を見つけ、メモリを完成させ、我が身に挿せば…！…フ…フハハハハハ…！…強勒だ、無敵だ、最強だ、

「ハ…ハハハハハ…！…！」

【WEATHER!】

私はお約束のウェザーに変身し、即座に標的の捕獲に入る

「…君の考えている事は分かっているよ、捕獲しようとしているんだろう？彼女を…」

「ええ、勿論ですよ！核融合を操るメモリ…！…素晴らしいにも程がある…！…」

「…さつきから随分好き勝手言つてくれるね？」

「ちなみに彼女、君と似ている部分があるね、君はドーパントコンプレックス、略してドパコン、彼女は核大好きっ子、つまりニュークリアコンプレックス、略してニュー・コン、New婚」

「そんな事はどうでもいい…！…ああ！核融合を操るメモリ…！…なんと素晴らしいのだろう！ハハ…！…ハハハハ…！」

「…テンションが上がりまくりですね…！…というか下がりませんけ

ど……！

「おお、外の人間にしては核の誤解が無いね、そりだよ核は最高に良いよ」

「お褒めの言葉ありがとうございます」

「だから……」

「では……」

「……この力は誰にも渡さないよ』

『その力を私にも分けてくれませんかね』』

直後、彼女の手から熱線のような物が放たれる、……違う……核だ、核を濃縮した物だ……

「素晴らしい……！……実に素晴らしい……！……その力さえあれば……テラ一など……要らない……！」

私は右手を上げ、彼女に雷を落とす

「おおつと……悪いけど、その能力……知つてているよ？……言わば『天候を操る程度の能力』だろう？」

「フフフ……そうですよ、素晴らしい能力だと思いませんかねえ……？」

「全ツ然？だつて……自然の力に頼つてただけじゃない、そんなんじや核には勝てないよ？」

核の前では……自然など無意味、という事ですかねえ……

【WEATHER】のメモリが自然の象徴なら

『核融合を操る程度の能力』は科学の象徴

「核融合の研究のモットーは……地上に太陽を……でしたかねえ……」

「知らないよ、外の事なんて」

「そういいながら、彼女は再び熱線を放つてくる

「じゃあ、私も混じらせて貰おつかな……超高速！」

ナスカが空君に高速で迫る

「ちょこまか動いても変わらないよ……どうせ見てないから」

「そういい、彼女は熱弾を乱射する、どうやら、あれも核を濃縮した物……妖怪ならまだしも、元々人間の私達が当たつたら、いえ、かすりでもしたら即死でしょうね

「……」

ナスカは一瞬怯んだが、自分から難易度の高い方へ進んでいく
「なるほど……訓練、といつ事ですか……超高速へ体を追いかせるた
めの……」

ナスカは次々と弾を避ける、そして、避け終わり、空君へ切りかかる
「ふんっ！」

「おおっと……危ない物振り回してんね、あ、核を持つてん私が言
える事じゃないか」

彼女は薄笑いを浮かべながらナスカブレード（あの剣）を左手で押
さえ、ナスカの胸部を踏みつけ、右手のオンバシラっぽい物を顔に
押し付け

「消し飛べ」

熱線をゼロ距離で打ち出す

「ツー！？うわああああ！」

即死、でしょうかね……あ、元々死んでましたね、彼……ん？

「……やつぱり幻想郷は……いい風が吹くなあ……」

上半身が消し飛んだはずの霧彦君が完全に復活し、隣に立っている
「……何故生きているんです？」

「あれ？消し飛んでいない。出力が低下したかなあ」

「私は……先日、レミリアちゃんの仕業で吸血鬼化してしまったんだ
……」

「説明を詳しく求めます」

「医者に同じく」

「……いやあ……夜の格闘技中にカプツとやられてね……血を送り込まれ
た」

「……W h y？」

「いや……何故かフランちゃんとレミリアちゃんから婚約を申し込まれ
て……取り合いになつて……夜這いされて……悪いね、此処から先は
色々な都合で言えないよ」

まあ……顔はいいし、性格も……幻想郷ではまともですしだ

何より子供受けする性格ですしね、納得いきますよ

「…だけど…私にそういう趣味は無いしね…」

「嘘だッ…！」

それはウソ

「…えい」

彼女が熱線を打ち出してくる、と同時に私とナスカは避ける
そして私は…空君を『雨』の能力を使い拘束+溺れさせる作戦に出る
空君の周りに水が集まり、拘束し、酸素を奪っていく

「…！？…！？」

しかし、彼女は…核を融合させ、熱で水を蒸発させる…

「…げほっ…ふう、驚いた…まあ、いいや、実は…こっちも本気は
出して無いんだよね」

【ARMS!】

彼女がメモリを取り出し、機会音声を鳴り響かすと…

左手に差し込む

すると、通常なら右手が変化するはずが、左手が剣へ変化した
しかも、変化したのは左手のみだった…

「アームズのメモリか…【利き手】を武器へ変化させるメモリ…何
処から手に入れたんだかな…」

彼女は右手を鍔はさみのような形へ変化させる

「さて、今までの序曲、これからが最終楽章、だよ」

私に転機をもたらす戦いが始まった…

惹かれるʌ／逃げるメモリ群（後書き）

…実は…イサウジで「行こう」と思つんだ…
冴子？誰それ食…誰か来たようだ…

惹かれる△／熱かい悩む神の火（前書き）

最近、妹紅たんにもつこもりされたる事に快感を覚え始めた私はどうすれば…

いえ、嘘ですけど…

妹紅たんのキャラは好きだが、ゲーム的にはトラウマなんだ、うん初回プレイの時は酷かった…

「ヤバイ…けーね先生鬼畜すぎだら…もう残機ないし…正直調子乗つてたな…」

「お？きみは いぐえふめいになっていた もじづくん じゃないか！」

「うつわ…たすがEXボス…弾幕濃いよ…何やつてんの…」

「…ん？今のは死亡エフロクト…なるほど、EXには中ボスが二人いるのね」

「とりあえず回」

↗リザレクション↙

「ちょ、つま！」

ピチューーン…（まさかの出現ポイントとジャストで重なり死亡）

「……じょ…冗談じや…」

あれ以降、妹紅さんの立ち絵と田線を合わせられません

惹かれるʌノ熱かい悩む神の火

「さて……霧彦君……左腕だけが変わったのは……別にいいとして……夜の格闘技について詳しい説明を求めます」

「おおい！突っ込んでよ！左手だけ変わるって珍しいでしょ！？おおーい！！」

「ああ……夜這いされ、見事に回避した私だが……何故かツイスターゲームをやろうと言う話になつてね……」

「何でだよ！突っ込みどころが多すぎる！」

「それで……中々勝負が付かなくて……『霧彦！吸血鬼にされたくなければ負けなさい！』『悪いね、私は案外子供っぽくてね、負けるのが大嫌いなんだ』『じゃあ死ね』……で噛み付かれて吸血鬼になるほど、ベット上で格闘技では……なかつたんですね、ふう、一瞬君の事を極度の口利きかと思つてしましましたよ」

「失礼な、私は幼女趣味などは全く無い、それに妹系キャラもだ、ああいうのを恋愛対象に取れるのは実際に妹が居ない人間だけだ」「……左手について突っ込みなよ！」

痺れを切らした空君が怒鳴り声を上げる

「あーはいはい、ナンダロウソノヒダリテハーフツウノドーパントチガウナー（超棒）」

霧彦君の棒読み、凄い棒読み、どれくらい棒読みかと言つと、音読み

ソフトぐらい棒読み

「……全力で消し飛ばしたい……聞いて驚くなー何故左手だけが変わつたかと言うと……言つといつ……と……」

「……そのオチだけは勘弁してくださいよ？」

「なんでだっけ……」

「うわあ……凄いテンショングりますね……」

「や、やつた！作戦通り！私つたら天才ね！」

「？が混ざってるよ

とりあえず…テンションが下がった事で少し冷静に戦えるでしょう

ね…

「う、うるさい…もういいよ…なるべく使うなって言われたけど…」

【QURETNA L COAT L US!】

あれは…ケツアルコアトルスのメモリ…何故彼女が…！

直後、彼女は首筋にメモリを挿す、そしてアームドのメモリが排出される…その姿は、まるで使われてないのに捨てられたゴム手袋のよう物悲しげに見えた

そして、彼女の体は急に燃え出し、まるで、爆発する寸前の太陽のように膨張し、周りの物を次々と壊し、翼端長12m 体長6m 体重2.8tの化け物に姿を変える…

「あれが…ケツアルコアトルス…なんてプレッシャーだ…」

彼女は耳を劈くような甲高い声を上げ、飛び立つ

よく見れば…右翼の付け根に巨大化した、先ほどのオンバシラのような物や、右足、左足、胸部、全てに変身前と同じような物がある…という事は…

「核も使つ…んですかねえ…勝てる気がしない…」

「名医君は確かに飛べなかつたんだよね…つまり、我单独でやれと…」

「そういう事です、というか日光浴びて何故大丈夫なんですかねえ？」

「ナスカに変身しているからだろ？」

「理解でき…ない！」

そんな事を言つてゐる間に、彼女は放射能の熱線を乱射しながら、突つ込んでくる、ついでに翼から羽の形をしたエネルギー弾を飛ばしてくる

「…つ…と…危ないですねえ…さつさと片付けてくださいよ」直後にナスカは飛び立ち、ケツアルコアトルスに切りかかる、が…

全く効いていない…と思ひきや、割かし効いている…

「…暇ですねえ…」

空で激戦が行われているのに、私は何も出来ない……別にじりつでもいいんですけどね

『ナスカブレードに切れぬ物など殆ど無い!』

『私の必殺技は百一十六式まであるぞ!』

『私の必殺技：パート2、!』

：激戦：

「よつしゃああ……古龍倒したああああ!……」

「お帰り……」

空君を背負つて帰つてきたナスカ、霧彦君

「……彼女は君に渡そう、好きに使つてくれ……」

「……そうさせてもらいますよ……フフフ……」

空を自由に飛びたいな……

「ケツアルコアトルスは……?」

「……あー……落とした」

「落とした!? バカか君は!」

この後、かなり長い口論の後……

さらに医者移動中……

「……どうなつているんだ……これ……」

医院にたどり着くと……

行列が出来ていた……

「一体何が……」

「おお! 先生! 医者辞めて探偵になるんだって! ?」

「なん……だと……! ?」

よく見れば、井坂医院が 井坂探偵事務所に……!
そして右下に……

達筆……八雲紫

「あ……あの……スキマババアアアアアアアアアアアア……!」

「とにかく先生! 頑張ってくれよ! みんな頼りにしてるからな!」

「先生！」

「先生！」

「ハハハ…ハハハハハ…」

…私は、ハ雲家を皆殺しにする事、そして、医者を本業に探偵を副業にする事にしましたが…

…これじゃあ、本当に仮面ライダーじゃないですか…

「いやいや…いやいやいやいや…」

…私の…人生に…転機が訪れた…

「ああ…ちょうどいい縄は何処にありましたっけ…?妹紅さんと並んで死にましょう…」

惹かれる△／熱かい悩む神の火（後書き）

モジコーさんは私のトラウマです
みすちーさんも私のトラウマです
イナバの鬼とともに私のトラウマです
東方とか、トラウマの宝庫です

そして何より…

小説を書いている時にブレーカーが落ちるのが一番のトラウマです…
今回もその犠牲、本来はもっと長かったのに…
申し訳ありません、このような小説で

「な虹黒ヒノな紅白へ偽つの幸せ（前書き）

地靈殿をプレイしたんですね…なんてこりか…ええ…うそ…
嘘…マジパネル…

丁な白黒と乙な紅白／偽りの幸せ

気持ちのいい朝が来た……もう動きたくない、正直生きるのが嫌になつてきましたよ……

井坂先生一ツ！！朝食まだですかー！？

文君が叫んでいるのが分かる、仕方が無い

「… 分かりました… 今作りますよ… 地獄の麻婆豆腐… て… いしか… わたしはそういうて、ドアを開ける、すると…」

田代の花君

八咫烏を食つた地獄鴉の空君が一人

「何で空君が此処に？」

「いーつ！」

「田や干の言葉…違ひ、それじや騒靈二姉妹ですよ」

あまり見たくないというか、何というか

「別にいいじゃないですか、彼女も天狗でしょう？」

「いや、違うでしょ、鴉です」と、残念がりながら、

「ええっ！？違ったの！？」

「空君… セメて自分がどういう種族だったかぐらこは覚えてましょ

「うよ…」

「背中に翼がある生物を人間とは呼びません」

「鳥」

「少なくとも鳥に手はあつまわんよ」

「夢に出て来たのですね、包丁で刺すと氣が狂うんですか?」

以下、無限ループなので省略します

…医者 + 動く核兵器移動中…

「いや、病院に来られても困るんですがねえ…」

「いいじやん！いいじやん！すげーじやん！」

「クライマックスジヤ…それでは時間の波を捕まえてしまってますよ
何故か院内にまで空君が付いてきた…正直…困る

「これじゃ…患者も寄り付きませんねえ…」

…いやあ…

「そうだ、どうせなら仕事を手伝つて…無理ですね」

「待つて、人の顔を見た瞬間に無理つて言つのはどうかと思つよ
絶対患者を激情させるだけですよ、この人…人じやないんですけど
「あ、あきらめんなよ！なんであきらめんだよそこで…もつと熱くなれよ！」

「核の熱は十分熱いのでいいですよ」

「あ、本当？えへへ~」

今の褒め言葉に入るんですか…？」

「というより、何故私に付いてくるんですかねえ…」

「んつとね…だって、井坂先生、私の姿見ても気味悪がらないし、
能力も怖がらないし…」

ああ…そういうことですか…確かに、近寄りがたい外見ですよねえ…
特に胸部の目が

「まあ、見慣れてますし、核融合だつて…放射能を撒き散らしてい
るなら怖いですが…制御できてるんでしょう？」

空君は、メスを珍しそうに見ていた

「…ん？何が言った？」

何だコイツ…解剖してやろうか…

空君は、メスを…口に運んで

「ちょっと、何故食そうと思つたんですか！？」

「んあ？え… だつて、これ… 人間が食べようとしてたし…」

「それはナイフであり、メスではない、そして何より、それはナイフではなく、ナイフで刺した物を食べようとしてるんですよー。」

「そーなのがー」

よかつた、思いとどまつてくれたようだ…

そんな時だ、来客が来たのは

「…おや、確か君は…」

黒と白のツートンカラーの服に魔女がよく被つてるような三角帽子、
ウエーブのかかった金色の髪

「…魔理沙君、だつたかな…」

私の中では、彼女は元気すぎて困るイメージがあつたのですがね…

今彼女は非常に落ち込んでいて、若干やつれている感じがする
「おや… 相当疲れているようですねえ…」

「お前… 探偵もやつてるんだよな…？」

彼女は此方の声など聞こえてないような口調で言つ

「…お願いだ… 霊夢を… 霊夢を助けてくれ…」

… 霊夢君、たしか… 巫女をやつていたような…

「あいつ… 妙な奴にそそのかされて…」

以下略

要点だけまとめる

靈夢君が騙される

完全に心酔

身も心も捧げる寸前

なんと分かりやすい

「まあ… とつあえず話つてみますか…」

医者 + 核 + 魔女移動中…

到着…

靈夢君は見当たりませんが、魔理沙君がとりあえずおかしな点を教えると言つたので…付いていく

「まず最初…あいつ、妙な奴に信仰対象を変えてから、賽銭箱が初めて、もう入らなくなつた、つて言つてたんだ…でも…」

そういうながら、魔理沙君は、賽銭箱のその部分をスライドさせる…と、中は見事に空だつた…

「…もう中身を回収しただけじゃないの?」

「そうとも考えたけど…この間、靈夢に言つたら、何言つてるのよ、魔理沙の目は節穴なの?つて真顔で言われたんだぜ…」

それは…

「ん?誰かと思えば魔理沙じゃない!よく来たわね」

向こう側から声を掛けられ、一同はそちらを向く

…と、青白い肌に銅色の鎧が所々にあり、顔から針が何本も突き出している

「あれが…妙な奴、だぜ」「
たしかに…妙ですね…」

あれは…LIAIRのメモリ…

…とりあえず帰る振りをして、林に身を隠しましょつかね…

「じゃあ、あいつ倒して終わりでいいんじゃないの?」

「駄目ですよ、今、あの怪物は彼女にとつて神です、攻撃でもしてみてください、彼女が本気で矛先を此方に向けて来ますよ」

「じゃあ…まずは…あいつから引き離さないと…」

「方法ならありますよ、あの怪物…もといライアードーパント…奴の能力は…『嘘を信じ込ませる程度の能力』とでも言えばいいでしょうかね…一種の催眠術です」

…何かいい手立ては…

「ビデオカメラとかあると楽なんですけどね…無いでしょ?」

「ビデオカメラってあれでしょ?外の人間がエーブイって奴撮る時に使う…」

「間違つてますよ、君の知識は」「
というか、何故知つている

「では…チャンスを待ちますかね…」

お約束通り、ウェザーに変身

何時も思つたのですが、この雷つて草などに当たつても引火しないん
ですね

『靈夢、今日も【賽銭箱の中には賽銭がたくさんある】ね』

今でしよう、私は即座にライナーが打ち出す針を雷で打ち落とす

『…？一円も入つて無いわよ…？ん？神？貴方…本当に神？』

『な、何言つてるんだよ！【私は神】だよ…』

もう一度打ち出された針を打ち落とす

『いや…違う…あんたなんか神じやない！ただのクズだ！…私を騙
したわね…？覚悟しなさいよ…』

「おお、事件解決…簡単だつたなあ…」

空君がメスをペン回しのように回しながら…つて

「なんで持つてきてるんですか…」

「いや、護身用」

「君の場合…いらないでしょ」

右手の三本目の足を振り回したほうが効果あると思つていますけどね

『畜生！失敗だ！どうする！？』

ライナー自体に対しても戦闘能力は無いですし、あとは任せといて大
丈夫でしょう

「さて…騙して悪いが仕事なんでな死んで貰うぜ」

…魔理沙君が隣で何かを言つていますね…まあ、大体予想は付いて
ましたけど…

「…分かつてはいたよ、最初から…君なら私に頼らうとも、自力
で何とかなると思つてましたからね…」

動機は分かりませんがね

まあ…マスター・スパークなどに気を付けねば大した敵でも…

【TABOO!】

タブーだと…？幹部クラスのメモリを直挿し…？確かに魅力的ではありますか…勝ち目は…？！

彼女は首元にメモリを挿す、すると、衣装が変化し、タブーの衣装のようになる…

「やはり、超人態にはならないのですねえ…」

「あ、そうそう、それはスキマ妖怪が弄くつたからだそうだよ」

「何の為に…？」

「井坂先生のドーパント大好き症候群を発祥させないため」

「…ケツァルコアトルスは変わつてましたよね？」

「ああ、あれは非売品

「非売品！？販売してるんですか…」

それより、どうした物か…直挿しのタブーだなんて…ナスカの時のように限界点を越えませんかねえ…

そんな事を考えていると、魔理沙君は複数のエネルギー弾を連射してくる、私と空君は即座に神社前に出る

「全く…仕事を随分減らしてくれたじゃない…」

「後ろからの声、…靈夢君も共犯か…！」

【NONE】

ゾーン…9×9マスのゾーンボードを張り、狙つた対象をボード上の狙つたマス目に瞬時に移動させるメモリ…

本来ならピラミッドに四本の足が生えた姿になるのですが…右手に白い籠手…というか若干スリムになつたゾーンドーパントがくつ付く形になつて…

「行くわよ？魔理沙

「あいよ、靈夢

直後にゾーンはボードを張る

「え…ええ？何だよこの展開…」

ライナーは関係ない人物だつたようだ…哀れな…

「相棒、これはチャンスだ…今、この場は乱戦になつて…博麗の巫女を討つことも可能だ…」

【HOPPER!】

何処からか現れた男がドーパントに…

「空君、超人態になつてますよ？あの人」

「ああ、それはね、主要人物だけが一部変化で、ああいう雑魚は普通に変化する、つていうご都合主義設定が…」

「メタはやめましょ、メタは」

「とりあえず、今、この場は五体のドーパントが居る…

「よし、私も使うかなーメモリ」

【ARMS!】

空君の左手が随分前に空氣だと思っていた鉄に…

「…全員ドーパント…」

凄い光景だ…

「魔理沙！さつさと片付けて私達の資金源を取り返すのよ…」

「了解だぜ！」

「どうやら…最近、私の元に異変解決の申し出が来ますからねえ… 村の人間にとつては、遠くて怪しい神社に住んでいる巫女よりも、すぐそばに居る強い医者が話易いんでしうねえ…」

タブーが弾を乱射し、ゾーンがその弾を移転させ、全く読めない弾道を作る

「なるほど…これは厄介…」

「ハハハッ！嘘吐き野郎とバツタ野郎も一緒に消し飛ぶといいぜ！」

「…今…お前、俺を笑つたな…？」

向こうの雑魚二人組みが、妙な殺氣を放つてゐる、もう…私達帰つてもいいのでは…

「行くぜ、相棒…」

「勿論だよ、兄貴…！」

【HOPPER!】

「つ田のホッパーですか…ホッパー兄弟とでも呼びましょう

「とりあえず、この戦いは…地味に後に響く戦いだつたと…いいます

か
ね
え
:

丁な白黒との紅白／貧乏な巫女ほど危ない（前書き）

昨日…悪い夢を見たんです…

学園都市つていう場所に…

なんか法則を無視する人間が…

たしか…名前は…

とある物理の法則無視…だつたような…

べ、別に宣伝なんかじやないんだからねつ！勘違いしないでよねつ！
しょ、小説を読もうで検索しても出てくることなんて無いんだかね
つ！

で…でも、

どうしてもアンタが検索したいつていうコトわ向する文さんやろく
あ w s e d r f t g y ふじこ 1 p

「な白黒どこの紅白／貧乏な巫女ほど危ない

さて…非常に不味い事になりましたねえ…

とりあえず、あの一人の…「ンビネーションが非常に高いせいでのに精一杯ですねえ…

「…空君、こんな時になんですが、君は何時も私と一緒に居ますけど…仕事とか大丈夫なんですか？」

「あー大丈夫、私が居なくても間欠泉から出る水の温度が下がるだけだから」

…そういう問題…なんでしょうねえ…

「そうかそうか、つまり…そういうことだったのね…昨日温泉に浸かろうとしたら異常に冷たくて一日中毛布に包まってガクガク震えることになつた理由はあ！」

「怒つてますよ、空君、謝つてください！激情して攻撃が激しくなる前に！」

「え？え？なんて言えば…」

「正直に言つて下さい！」

「ぞ、ぞまあみるーばーか！腋巫女！貧乳！幸薄！性悪！金の亡者！」

「！」

「たしかに正直ですけどおー！」

「よし、魔理沙、見るも無残な姿になるまで攻撃し続けるわよ」

「了解だぜ」

プランD所謂ピンチつて奴ですねえ…どうしたものか…

「駄目だ…空君！謝つてください！」

「え？また？なんて言えば…」

「靈夢君は聞く耳を持たないでしょ？から…魔理沙君に素直に言って下さい！」

「え？…何無駄な努力続けるの？無駄無駄無駄、努力したってそんな火力しか出ないんじや、一生掛かっても私に追い付く事は無い

ね、というより火力重視は一人も要らないし、というかそのマスター・スパーク？それ、他人の真似事でしょ？自分で大した火力も出せないくせに…よく『弾幕はパワーだぜ！』とか言えるものだね？実（以下略）

「確かに素直…ああもう、君に頼つた私が馬鹿でした！」
「…もう…駄目だ…死のう…」
「お前も…一緒に地獄へ落ちよう…」
「じゃあ、俺の妹だね！」
「「我等は地獄兄弟！」」
「長男！矢車想！」
「次男！影山瞬！」
「長女！霧雨魔理沙！」
「妙なチームが結成された…！？」
「お前も…このホッパーメモリを…」
「気持ち悪いから嫌だぜ」
「……兄貴、諦めよつ」
「畜生…」
解散速過ぎるでしょ…
「…しかし、タブー…衣装だけになつたとはい…魅力できですねえ…」
「んん？そう言われて見れば、胸元を強調してゐるね、あの衣装…大きさも無いのにさあ、ハハハ」
「靈夢、消し飛ばすぜ、細胞の一つも残さず…！」
「勿論よ」
「だめだこの空…はやく何とかしないと…」
「ん？魅力的…？井坂先生、ああいう衣装が好み？」
「いえ…私の言つてゐる事は、容姿ではなく…能力がですねえ…」
「よし、殺してでも奪い取るつ、あれなら井坂先生も私に振り向いてくれるはず」
「聞けやコラ」

とつあえず少し落ち着きましょ。ついよ。

「兄貴…俺は新しい地獄を知つてしまつた…空氣、とこいつ地獄を…」

「相棒…俺達はずうつと一緒にだ…」

「「我が魂、NECCTと共にありいといいい…違つ」」

ホツパー兄弟は、メモリを投げ捨て、階段を飛び降りる…

自殺…え？何で？

「……自殺…」

「自殺、だな」

「自殺かあ…」

『うわあ！神社から死体が…やつぱりお参りするのなんてやめようよ…』

『馬鹿！そんなんじやお父さんの病氣治らないよ…』

『医者に頼めばいいじやん…』

『お父さんを負ぶつてあんな恐ろしい竹の林抜けられないわよ…』

『違うよ！村に井坂医院つて凄腕の医者が居るんだよ…』

『やうなの…？だったらお参りする必要なんてないわね…』このお賽

銭も診察代に回そう…』

『うん！そうしましょ…やつしましょ…やつしましょ…たら、そうしましようか…』

『『オラこんな神社嫌だ…オラこんな神社嫌だ…井坂医院に行くだ…』』

：密一名追加つと…

：…もはや弾幕で追い詰めて殺すなど生ぬる…塵になれい…』

「それは私の台詞ですよ！魔理沙君！」

人の台詞まで持つていくとは…恐るべし、盗難癖

「…いや…もういこわ、魔理沙…諦めましょ…」

「…Why！？何故ベストを取くわないのか…」

「…やつぱり、信用できない神よりも、信用できる医学のが…信じられるのよ…」

「…じやあ、これからどうするんだ…？知つてゐるんだぜ…靈夢…昨

丁な白黒といな紅白／貧乏な巫女ほじ危ない（後書き）

最近、夢を見るんです、空さんと、井坂先生が、イチャついて……そのまま……ね？
末期でしょ？

○は法則に従わない／医者 井坂（前書き）

今回、空氣使いさんの小説、とある物質の法則無視とクロスオーバーさせていただきました

私の弱小、趣味全開な小説とはまったく違いとでも、まともな小説なので、是非、御覧になつてください、とても面白いです

とか言いましたけど、実質、空氣使いさんは、実際に何度も交流（ねつ 性的）していく、言わば友人なんで、そこまで持ち上げる必要はないんですけどね、まあ、ありじやないか？貴様程度の感覚で見てください

〇は法則に従わない／医者 井坂

あれから…色々な事がありました…

まだ三週間しか経つて居ないのに…五年ぐらい過(1)している気がしましたよ…

まず最初に…文君が…何処からか、蓬莱の薬を持ってきて…無理矢理…

私は…

「待つてください、人の命は制限があるからこそ、儂く美しい物なんですね…」

と、言いましたが…

「貴方が死んだら誰が私の朝食を作るんですか！」

と、怒られて…無理矢理…

…もしかして、既に感覚が狂っているのか…？本当に五年経つているのか…？

いや、靈夢君の姿に変化が無いから大丈夫だ…多分

…なんて事を、考えながら…朝食を作ろうと…部屋に入つたら…

「…何かいい事でもあつたんですか？」

むつちや翼をバツサバツサさせている文君

「特ダネですよ！特 ダ ネ！」

「そうですか…」

どうせまともな物では無いんでしょうけどね…

『須藤霧彦！ついにスカーレット姉妹と重婚…』

…… Wh y?

『尚、今回めでたくご結婚なさつたスカーレット・S・霧彦さんにお話を聞いた所』

『もう、口リコンとでも何とでも行つてくれ、だが、私は一つだけ言える！私は幸せの絶頂を迎えていると！合法だ！見た目十歳以下でも二十歳以上だから合法だ！私をそんな目で見るなあああああ

！－【NASA！】消える消える消える……－－』

『と、大変発狂しているようでしたが、その場に居合わせた従者の十六夜さんによって取り押さえられましたその際に…』

『離せ！私は霧彦だぞ！』

『などと、再び発狂しており…』

もうだめだ、あの霧彦…

『いや、特ダネですけどねえ……ハハハ…笑うしか無い…』

一方、風都では…

「若菜、お前にプレゼントだ…」

「何ですか？お父様」

「これだ…これこそ…女王の証だよ…」

「この光は…」

ゴッタファザーとその娘はアタッシュケースを開け、中に入っている緑色の物質を眺める…

「あら、面白そうね、それ

そして、アタッシュケースは消え、代わりに奇妙な服装をした、金髪の女性が現れる…（女性であり、少女ではない、これが示す事は…）ハ雲紫だ

「あなた…！少し調子に乗りすぎじゃない！？」

「あら、私と戦うとでも？今の貴女はただの人間よ？」

「…若菜、仕方が無い、実は…あれ、複製が何個もあるのだよ

「…ええ？女王の証なのに…」

「細かい事は気にするな…」

親子が会話で盛り上がっている所に、 紫が茶々を入れる

「でも…あちらには、GENEを操れる人物が居ないのよね…」

「ハツハツハ…それは残念だな…あれは、ジーンのメモリを使用できる者が居なければ、活用出来ないからな…」

「…そういえば…前にちょっとだけ覗いた世界に…居たわね、そ

れが可能な人間が…」

その一言を言い、彼女は消えた…スキマの中へと…

「…お父様…あの女…速く手を打つたほうが…」

「安心したまえ、既に手は打つてあるさ…」

そして幻想郷

「…空君、駄目ですって、いや、駄目ですって、無理ですよ」

「…ええ？似合つてゐるじゃない…」

「いや、似合つてゐる以前に…核融合する人をね？病院内をうろつかせるといつ事事態に無理が…」

もう嫌だ…病院に着てみれば、赤と青の奇妙なカラーーリングのナース服を来た空君が…

（言えない、鳥頭の馬鹿を病院で働かせるのは無理だ、なんて…）

（言えない、この服を貰つて着ていてから働かせてくれなんて…）

「とりあえず無理ですよ、無理無理、なんで頑張るんだそこで、諦めろよ」

「なんで諦めるんだよそこで…！」

（畜生…食い下がるな…患者にタミフルでも間違つて渡したらどうするんですか…）

（畜生…粘るな…私のナース姿なんて、そちらの人間なら『眼福じやーー』とか言つてOK出すのに…）

「…無理ですって」

「無理じゃないって」

「無理ですよ」

「無理言つなー…」

「無理ー！」

「あきらめんなよー！」

「君は院内に居るには熱すぎるー…」

「調度いいですよー…」

「大体なんですか!? その服の色!? 不健康でしょ! 「
け、血液を表現しているんだよ! 多分! 」

「多分て…

「…ああ、もういいですよ…ただし、接客のみですからね、薬品類
は触らせませんよ」

「え? 別にいいよ」

いいんですか…何をするんだ…一体…

…場面を変え、とある少年の話へ

夜道を歩く、一人の少年の姿があつた、年頃は高校一年生ほどだが、
驚くほど飾り気が無く、髪も、整えた様子が無く、服も学校指定の
夏服を着用している

「暑い…いや、異常気象すぎるーもう一ヶ月なの! 」…おま…33
つて! ふざけてやがる! 」

少年は、独り言を呟く、いや、叫ぶ、このあたり、少々気がふれて
いる事が伺える

【 ソロロロロ! 】

少年の携帯が鳴り出す、此方もまた飾り気が全く無く、もう青春を
何処に置いてきた、といった感じだ

携帯の画面には、かつて彼を絶望の淵から救い出した友人（または
厄介者）の名前が映っていた

【 風波聖徒】

「もしも『YOU! 早く【兄貴塩】or【弟味噌】を買つて来るん
だ! 早く! 459個限定販売だ! いいか! 絶対買うんだ! 買えなけ
ればお前は明日からチョークの粉を食つ生活が始まる…! 』…分か
つた…」

彼は自分で買いに行けよ、そして、お前、カツブラーーメン以外も食
えよ…という言葉を叫びたくなつたが、余計暑くなりそうだから…
とこう思いが彼を止めた

「…自分で行けよ…」

無理だつた

『無理だ！俺は今…あの憎たらしい教師…慧音を滅する事に夢中な

【ピチューーン】ホアアアアア…』

「また 東 方 か」

最近、風波は東方Projectという同人ゲームに夢中になつていた、そのゲームは、幻想郷というところで起きる異変を巫女さんと普通の魔法使いが解決するという、シンプルな物だが、キャラクターは個性的で、音楽も素晴らしい、独特な絵は恋心さえ擗る（by 風波）ゲームだ

『…畜生…！畜生…！もつこたんに近づく奴は全て俺が消し炭にしてやる…！』

「慧音、普通にいい奴じやないか」

『俺は教師という生物が嫌いなんだ！それと面倒事も嫌いなんだ！…まあ、教師が嫌いなのは分かるぞ…お前、教師から嫌がられたんだっけ？』

『たかが…窓を全て割つたぐらいで…』

「お前が悪いんじやないか！」

『つむさこいつるさこいつ【ピチューーン】ニ〇〇〇〇…！…もつこたん！』

何故君は俺に牙を向ける…？』

そういうゲームだからだろう…と言いたくなる気持ちを抑える

「お前つてさ、妹紅が好きだつたんだっけ？」

『ああ、五番目にな』

「上から順に言つてみる」

『お姫ちゃん、あやや、フランちゃん、るみや、もつこたん』

「…慧音は？」

『伊藤誠より嫌いだ』

相当だな、と彼は思いながらも、兄貴塩、弟味噌をカートに突っ込む、会話しながらも着実に任務を遂行する、完全任務、パーフェクトミッションだ…（by 白い矢車隊長）

『 そういうやさーお前は誰がお気に入りよ?』

「ん、
妖夢」

『ほんの口りコンが!』

「つるせえ、フランとルーニアが選択肢に入っているお前にだけは言われたくない」

『生が！』

「悪い、

悪い、それもお前にだけは言わせたくない ケレイジー」「ア」

ええい！ 妖夢も死ねい！ 幽々子様は俺の物だ！」

貴様、後で覚えていろ……見るも無残な姿へと進化させてやろう

三

駄目だ……」Jのヒート…早くなんとかしないと…などと考えながら、レジへ向かい、支払いを済ませる

「兄貴塩と弟味噌買つたから今から帰るわ」

『……今さ妖夢の1／16ファイギュアが届いたんだが……お前のか……』
「見るな！待つてろ、今すぐ貴様を鳥目にしてやるからな！今日が
ら夜は目が見えなくなるよ！」

『……ヒヤハツ……！いい事考えた……！圧力鍋で揚げてやるぜえ……！ヒ
アはははははははは

「や…やめや…そんな事…！」

想像してみろよ……！圧力鍋でじっくり揚げられながら……！『熱い

「熱い！」ともがき苦しむ妖夢の姿をよおす……アヘ顔で

「何でだよ！主に最後、何でだよ！ありえないだろ！」

「ヤヘヤ 興奮してきたよ。しかし全く圧力鍋で揚げてくれる

「……馬鹿な奴だ、俺には切り札がある……！」／16 藤原妹紅フイギ
ユア……！あれを俺は隠し持つていい……！」

『何！？そいつは何処にあるんだ！？言え！』

「…では、大人しく…妖夢フイギュアを俺のPCの『デスクトップ』の隣に置くんだ…』

『クツ…いいだろう…』

そういうながら、彼は玄関を開ける、風波の家は異常に大きく、部屋まではかなりある

『…おまえ、デスクトップ…妖夢ちゃん、…つわ、マウスカーソルも妖夢ちゃん…おい、画像フォルダ、全部妖夢ちゃん、…トップシリクレット？…バスが必要か…【YOU MU】…開いたよ…馬鹿か！？…中身…全部妖夢じゃねえか！…』

「貴様…！」

『三角木馬に乗る妖夢…蠍燭妖夢…水攻め妖夢…監禁妖夢…スク水妖夢…うわあ…』

「別にいいだろ！全部自作だ！」

『自作かよ！絵え上手ッ！…』

「…そうそう、その中にあるファイルの中身見てみろ…』

『…俺と妖夢と（都合により自主規制）…同人誌だと…！？これもまさか…』

「自作、だ」

『…うつわー！お前これなんて実写…？ねえ…！…なんて実写…？…うつわ…お前…やりすぎ…』

そして、彼は自室のドアを開ける

「あ…お、お帰り…』飯にする？お風呂に入る？それとも…俺？…小便はすませたか？」

神様にお祈りは？

部屋の隅でガタガタふるえて命乞いをする心の準備はOK？

「…畜生…この野郎が！」

『逆ギレ！？』

『逆ギレのがつえーんだよ！』

「何処の自衛隊？！」

「神風…見せてやるよお…！」

「だから何処の自衛隊だよ…！」

「俺の上腕一頭筋が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！ばあくねつ！ゴッドお…！ フインガー…！」

「違え、いろいろと、違つ…！ だがしかし…！ 貴様に言ひ事がある…！」

彼は、一度深呼吸し、何処からか青い薔薇を取り出し、台詞を言つ
「薔薇は最も美しく最も強い者のために咲きます。だから私は闘う
のです」

「何処の黄金のライダーだ！」

「君の血が吸いたいと薔薇が言つています」

「俺の血は緑色だぜ？」

「アンデットか！」

「そして、私は美味しい人間だぜ！」

「魔法使いか！ええい！先手必勝！」

彼は、急に風波に殴りかかる

「うわっ！ 卑怯な！ 必殺！ 妖夢ガード（妖夢フイギュアを目の前に）

！」

「お前のが卑怯だ！」

「卑怯もラツキヨウも大好物だぜえーっ…！」

「蟹刑事…！」

「…見ろよ…！」のフイギュアの首が折れそつだぜえ…？ クハハハ
ハハ…！」

「やめろ…やめてくれえ！」

「考えてみろよ…首を折られそつになつて… 苦しげる妖夢の姿を…

…アクメ顔で」

「だから何でだよ！」

そういうながら、彼は、もう一度殴りかかる…が、その拳は届かな
かつた

何故なら…下に落ちたからだ…

「…？え？何処に…？…まさか…え？げ…幻想…入…り？」

風波は、がつくりと膝を付く

「…ス…スキマババアアアアアアア…-----グハツ

！？これは…花瓶！？だ…駄目だ…出血量が多すぎる…」

この後、井坂深紅郎と、【彼】が運命的な出会いをするのは言つま
でもない…

○は法則に従わない／医者 井坂（後書き）

え…？性格が違つって？気にしない、気にしない、多分あつてゐる、80%あつてゐる、といつより、井坂先生は気すぎだら…。こく…

〇は法則に従わない／スキマババアにレクイエムを（前書き）

スキマババア、彼女の事も…たまにでいいですから…思い出してください
…

途中、空氣使いさんの書いた文章があります、探してみてください！
…ちなみに、三部構成です、サー・セン WWWWWWW

○は法則に従わない／スキマババアにレクイエムを

朦朧としていた意識が覚醒（no^t 剣）してくる

「知らない天上だ……違う、天井だ……天井？違う、天井、待て、落ち着け！素数を数える……1、3、5、6、7、違う、それは奇数……でもない！ならば……なんだ？」

少々、混乱しそぎて、風波の家…和室なんてあつたつけ…？いや、ない…ダンシングルームはあつても…和室はない…ならば…此處は…何処だ？…そうか、夢か、夢だな、こいつは夢だ、耳を抓つたら痛いけど…夢だ

「痛え…あれ？夢じやない？つて言つか…耳が無い…！」

これは緊急事態だ、はやくバンドエイドを…！、だれかヘルプミー

——ミナサンガンダムサイコウツス

ファクユウレール癌食べたい

…、今、別の作者が憑依した…！？違う…俺は…何を言つてているんだ…！？

「…耳は、ある…………うん、狐耳？…あれ？大丈夫ですか？九尾の狐のコスプレなんかして…Wh y？」

気が付けば…俺の目の前には…コスプレ好き（仮名）な変態さんが立つていた

「…（なんなんだ、この人間…紫様も妙な奴を連れてくる…）」「…みょん？みょん、Oh—//Ⅲ—!—Oh—!—N i c e！みょおおおん！！」

思わず口走つてしまつた…若干引かれている、そりや、自分だつて少し引いているぐらいだ、普通引くだろ？…の人…よく見れば…東方の…八雲…藍…に…似て…似…酷似…している…

「失礼な事をお聞きしますが、貴女は…コスプレイ…八雲、藍さんですか…？」

「…（話したくないな…） そうだが…」

絶対今、話したくないとか思われたよ、絶対

…待てよ？幻想入りか？幻想入りなのか？そんな馬鹿な…！

「…じゃあ…此処は…マヨヒガ？」

「そうだが？」

なんてこつた！最悪のパターンの一つじゃないか…！…もつとも最悪なルーミアの目の前パターンは避けられたが…！…これじゃあ…いつ、俺の理性がぶつ飛ぶか…分かつたもんじゃない…

得策は…！…逃げ出すこと！

「お世話になりました！親孝行出来なくてすみません…！」

俺は即座に脱兎のごとく逃げ出した

「あ、待て！脱走者だ！あえ…！あえ…！」

「何をやつてるの！藍、橙、目標を確實に捕らえるのよ…」

「了解！」

と、幼い声だから恐らく橙

「了解！」

と、大人びた声だから、恐らく藍

「振り切るぜ！貴様らに俺の能力を教えてやる！絶対逃^{エスケープ}亡^だ！」

即座に、隣から、橙がシザースアタックを仕掛けてくる、即座に俺は、空気の壁を作成し、はじき返す

「痛ッ！空気なのに痛い！痛いよらんしゃまあああ…！」

「ちえええええん…！瘤ができるじゃないか…！畜生…今死ね！すぐ死ね！骨まで碎けろお…！」

逆上…だと…！？じょ…「冗談じや…！」んなときに…

『干^ハ手こずつていいようつだな、尻を貸そつ』

とか来ればいいのになあ…！

「よつしゃ…あとは門を打ち破れば…！…」

「騙して悪いが結界が張られている！外に出る事は出来ない！」

「俺に…突き破れない！壁はねええええ…！」

結界だつて物質だ！俺は即座にい、クツキーより脆く想像し、サイ^{イメージ}

□ ラッシャーを決める！

これからは…！俺が ンダムだ！（錯乱中）

病院内

…思つたより、空君が働いてくれますねえ…特に、男性客への受け（ヒート…性的…）がいい…

「次の方どうぞー」

…空君の声だ、わりと、まともに仕事をしている…

「よお、井坂先生…いい嫁さんを貰つたなあ…えらいベっぴんさんじゃないか！」

「…はあ、違いますよ、彼女はアルバイトです…いえ、手伝いと言いますか…」

「なんだ…違うのか…」

一瞬、がつかりして、次の瞬間にこんな事を言つた

「じゃあ、俺が貰つてもいいって事か？」

「やめときましょ、彼女、軽く人の一人や一人は焼き殺しますよ
その一言に、男性の顔から笑みが消える、やっぱり妖怪ですしね、
信憑性があるんでしょう

そんな事を言つていると、突如ドアが開いた

「井坂先生、急患だつてよ、名前は…かぜな…違つた御神光みかみあきらだとよ

「だ、そうです、悪いですが、後でもう一度診察しますよ」

「そうか…残念だなあ…」

男性が外に出て行き、代わりに、夏服来た、高校一年生が出現した…

「…俺…俺…俺…幻想入りして…狐に…追い掛け回されて…」

「分かりました、精神安定剤を出しておきましょ」

「普段から服用しているよ…！」

「そうですか、では量を増やしましょ」

「とりあえず話しを聞いてくれよ…」

少年説明中

「なるほど、起きたら藍だつた」と

「そう言つ事です… なあお願いだよ! 元の世界に返してくれよ。」

「村人に話を聞いたら
何故和の所は？」

「村人に話を聞いたら……みんな……『井坂先生がなんとかしてくれるよ！』『井坂先生が居れば……この村の将来は安泰だ！』としか言わないんだ……」

（なるほど 私は祟められてしるよ）（後の風神である。）

しょ「んか…」

少年•医者移動中…

『メイドー！一ソーパード長ーメイドー！一ソーパード長ー』

盛り上かでしる
井口 霧彦君と レーヴア君の哥で

『もういやだ…このお嬢様と…ご主人様…』
そして、端で紅魔館のメイド長の…十六夜咲夜

あまつこも可愛そつなので、五十円あげて泣くな、と囁いたら、

ナイフを抜き、うしろで阿敷ざぶつ

「...どうしますか?」

「待ってください」この脇腋に束されたナイフを抜くなしないです……」

「私は不死身の体を持つている、その証拠に今まで一度も死んだ事

か……一度しか死んだ事が無い……」

「おお、坂本さん（生約）坂本さん（生約）

少々、痛いですが、問題はありませんねえ……

「で、どうするんですか？」

「…そうですね…スキマ妖怪に殴りこみにでも行きますか？」

「いいですね、それ、簡略的、かつ効率的、でも…どうやって…？」

「これを読んでください…」

私は、紙切れを渡す

「（何処から取り出した…？）…えっと…スキマババアーッ…少女臭？？馬鹿馬鹿しい…！…めえから臭つて来るのは加…「分かつわ、そこまで死にたいのなら殺してあげるわ」うわあああ…！…スキマババアだああ…！」

召還に成功したようですねえ…

「よし、行きますよ…ええと…光君…？」

「…や、やつてやる…やつてやるや…！」

「悪いけど…貴方をまだ帰す訳にはいかないわ…私の崇高な目的の為にも…幻想郷を守るためにも…！」

科学と医学が交差する時…物語が始まらない…！…

〇は法則に従わない／スキマババアにレクイエムを（後書き）

この物語は……つまらない……ない！！
スキマババアは……嫌い……ではない！！
慧音も……嫌い……ではない！！
影山も……嫌い……ではない！！
矢車も……嫌い……ではない！！
ただし、草加、てめーは駄目だ

今日はクソマジメに行きました、所謂シリアル犯です（not

シリアル

：ああいうクソマジメな奴が損をするんだ！そんな世の中でいいのか！？

そいつらを殺せ！撃てえーっ！

父親を殺しておいて…馬鹿を見たで済ませるのか！？」こつは殺されないと…駄目だあーッ！！（以下略）

題名は違いますが、一応前回から続いております、ご注意を

幻想郷を守るためにも、ですか…

「幻想郷を守るため…？」

光君がそんな事を言う、確かに気になりますがね…貴方が聞いても
答えないと…

「…私は見てしまったのよ、此処に限りなく近い、けれど同じではない世界で…妙な泥人形が…幻想郷を壊すのを…」

…ええ、答えると思つてましたよ？最初から…

「…で、何で俺を…」

怪訝な顔をして、光君が問う

「…この妙な物体、有機情報制御器官試作体／ガイアログレッサ…」
→つて言つんだけど…」

「え…？何…？対有機生命体コントラクト用ヒューマノイド・インターフェース？」

「そんなユニークな物じや無いわよ…」

ユニーク（笑）

「…で、それを俺にどうしようと…？」

「これを私の遺伝子に組み込んでもううわ、貴方の法則無視でね？」
オーバーライン

法則無視…？付いて行けない…ハイレベルすぎる…

「…そんな事出来るのか？」

「出来るわよ、貴方の能力、大まかにイメージしただけで、細かいところまで設定できるから…【ガイアログレッサー＝ハ雲紫の遺伝子】というイメージだけで完成よ」

…なるほど、しかし

「…それは、どのような物質なんですかねえ？」

「地球の記憶、無限アーカイブとの接続を可能にするわ…時期が
経てば、【運命の子】と同等の能力を得る事さえ可能」

紫が得意気に話す

「そうですか…しかし、それは貴女には不可能でしょう…」

「……」

「…此処からは、私の推測ですが…恐らく、泥人形とは、園咲若菜の【CLAYDOLL】…通常の人間ならば、許容範囲を遥かに超える地球の記憶、そのデータ量全て…許容範囲を超えたとしても…その尋常じゃない回復力で、回復するのではなく、自分を適する形に【作り変える】…違いますか？」

「…そうね、合ってるわ、でも私は人間ではない、【妖怪】よ」

「しかし、それほどの回復力は無い、そうでしょう？」

「…それでも、私が…遺伝子に組み込まなければ誰が組み込むのよ…？」

ハ雲紫は若干イラついたように問いかけてくる

ここで、皆さん思い出して欲しい…私は今、人間だろうか？

違う、蓬莱人だ

「私ですよ、私は既に人間でなく、蓬莱人ですからねえ…」

蓬莱人の回復力を色々と実験してみたんですけどねぇ…（主に妹紅君を実験台にして…実験の内容？電磁パルスを神経に直接流し込んだり（多少、表現不可の自体が起きて、妹紅君に新しい性癖が生まれる所でした）、焼け傷への回復速度（中々焼けずに、苦労しました）、放射能を浴びた場合に回復力が低下するかどうかの実験（実験場所選びに時間が掛かりました）…いいデータが取れま、うわ、貴方達、土足で上がんなにs k u a w s e d r f t g y f u j i c u p）最低でも0・005秒、その間には完全に回復する事が判明しました、クレイドールの回復時間は、私のデータ収集時と変わつて無ければ0・02、蓬莱人が圧倒的に速いですしね、

行けるでしょう

「…では、頼みますよ、光君」

「ちょ、ちょっと…！」

紫？君が止めに入る

「何時でもいけるけどさあ…」

「では、なるべく早いほうがいい、早速始めましょう

一方風都では…

「お父様、対抗策というのは…」

父親と娘の会話、それは誰も入り込めない空間である
「何、簡単な事さ…この世界にガイアメモリが無ければ、他の世界
から持つてこればいい、いや、来るのを待つ、という表現のが正しい
いかな」

直後に、空間を絵の具で塗りつぶしたように、赤の文字が並んでい
る奇妙な空間が開き、中から四三半はあるであろう、怪物が姿を現
す…

「…！？お父様…」これは…！？」

「ツハツハツハ…若菜、お前の真の姿だよ、クレイドールエクス
リーム…」

そして、怪物が姿を人間に戻す、それは…園咲若菜だつた

「申し訳ないですわ、お父様、あちら側ではガイアログレッサー
の開発が遅れていますの、【左翔太郎】がエクストリームに結局
適合できず、Wがエクストリームへと変身できなく、データ採取が
進まなかつたんですね」

「そうか、しかし、無事ならばそれでいい…」

「お、お父様？これは…」

突如現れたもう一人の自分に娘は戸惑う

「安心しろ、若菜…お前を殺したりなどはしないさ…ただ、彼女に
は幻想郷からメモリを持って来てもらつだけだ…」

「そう言う事よ、ふふふ…違う世界の人間は、違う世界の自分に危
害などを加えてはいけない…でしたっけ？」

「おや、そこまで話が進んでいたのか…あちらの私は相当気が早い
ようだ…ハツハツハ…」

娘は思つ

理解できないから怖い
理解できないから恐れる
ならば、全て受け入れよう、と

そして幻想郷へ

「…本当に成功したの？」

「ええ、成功しましたよ？今、馴染んでいる所です」

「そろそろ帰らせてください」

作業はあっさりと終わつた、えい、の一言で終わりですよ、なんと

呆氣も無い…

「ええ？ああ、帰つていいわよ…」

「…一目、妖夢を見たかったが…仕方が無い…まあ、アイツ風波に自慢ぐらいは出来るだろ…」

即座に足元にスキマが開き、落ちていく光君、よく分かりませんでした…

能力、とか持つてるんですかねえ…？

惜しい事をしたかもしません…

「…で、この世界にも泥人形が来る可能性は…？」

「恐らく100%、ガイアメモリ盗んだし」

「何故盗んだし」

「聞かないでくれるかしら？」

…異常に怖い…！

などと言つていたら

「あらあら、随分と余裕なのね？」

神社の階段を登つてくる一人の女性…あれは…

「園咲（井坂）若菜（深紅郎）！？何故此処に…！？」

『やめて〜ください〜』

『よい〜ではないか〜？』

駄目だ、不釣合いすぎる、後ろの歌が

『P A Dを外して素直になれ！』

少し黙つて欲しいってか、咲夜君、吹つ切れて一緒に歌つてますよ、何やつてんですか…

「……」

「姉を狂わせた…あなただけは許さない…！…【C L A Y D O L】

「…違いますよ、促進させただけですよ、【WE】ちょ、バグつてますよ…【WE】お、おま…こんな時に…【WEYYYYYY！】

!】ウエイーって何ですかウエイーって、【WEATHER!】直つた…」

若菜君は、前の姿とは違い、四三半はある、巨大な姿へと変わる…「…！なるほど、クレイドール…エクストリームという事ですか…紫君、あちらの馬鹿騒ぎしている馬鹿共を非難…違う、避難させてください」

「分かったわよ…」

さて、私の姿は…

何も変わらない

変わらない

「キブンガ…イイ…」

あちらのクレイドールエクストリーム…以下CX

ゲームセンターではない

は、相当ハイなようで、多数の重力弾を連射してくる…

「と言うより…ガイアメモリと一体化しているから人間化は不可能なんじや…？」

「…ガイアメモリ…ガイアログレッサー…テキゴウシタカラ

「…ああ、そうですか、つていうか何気にちゃんと答えてくれる、いい

人じやないですかね？

とりあえず、私は重力弾を避ける、いや、だつて、日頃から核の弾幕避けてれば…こんなの…

「…「ネクト」

「ネクト？連結？一体何を…
と、思つていたら、重力弾が私に集まつてきた…
回避不可能じゃないか…？」

そうだ、これは弾幕「」じゃないから…回避できなくとも別に…
誤算すぎる

直後に潰れる体中

右手、右足、むしろ全身

「…オワツタ…テゴタエノナイ…」

…医者修正中…

気が付けば、私は痛覚が崩壊していました、驚きですね

…私が、人間体に戻れるのは、人間体の時に適合したからですよ？
あ、普通の人間では無理ですけどね

私は、蓬萊人ですから

「…エエエクストリイイイイムウ！…」

一度言つてみたかった台詞を叫ぶ、だつて…言いたくないですか？
この台詞…

私の新しい姿は、

体は蜃氣楼のように揺らめき、それを冷氣で凍らせている感じで、
目は太陽のように光り…つて、まあ、体中が天氣だと思って下さい
犬…違う、これは天照大御神ですかねえ…風神 天照大御神
なんと分かり易い…！

「キ…キブンガ…あまりよくないですよ…！」…気持ち悪い…四つん
這いに違和感がありすぎる！」

あ、まともに喋れますね
良かつた…

戦闘中に

【キブンガイイ…】

【キブンガイイ…】

これだけだつたら怖すぎますものね、…落ち着こう

私の……最後の戦いが……始まる……いや、始まりますよ？始まら……な
い！……っていうオチはありませんから

次回……（第一部）最終回！！

……いや、この小説に第一部も何も無いんですけどね、多少変わるとすれば、

戦闘が全く無くなる程度です、ハイ

W... 永遠に... Sankurou Hisaka (前書き)

便利な単語登録機能、これで東方の出ででて句詞を登録すると非常に便利なのですが…

変換ミスが酷いことになるんですね

お前もいひつてやるー

お前妹紅してやるー

わつりわつりにじてやんよー

すみません、謝ります

反省の色全く無し

今から行くよー

今から衣玖よー

空氣でも読むんですかね

イメチョンした?

イメ橙した?

「スペアですね、分かります

以上の事を踏まえ、計年収

以上の事を踏まえ、慧音んじゅう

ある意味年収より欲しいかもしない

すみませんでした、神に命を返してきます

橘咲也、仮面ライダーギャレンだ

橘咲夜、仮面（P A D的な意味で）ライダーギャルわすみません
でした文まりごくあわせだらつどうふじこーだ

…おまけ…

「ああ、検索を始めよ…キーワードは…スキマババア」

ヒュン、ヒュンヒュン、「ロスツ…

その後、フィリップの意識は戻らなかった…

劇中で、マジメにあの本棚がフィリップに当たらないのが不思議です

CXは重力弾を乱射し、私は蜃氣楼を作り、避ける

先ほどからこれの繰り返しだ

一応、無限アーカイブに接続し、倒す方法を探してはいるんですけどねえ…

見つからない、向こうも同じでしょ、恐らく見つからないのです、私の倒し方が…

それだから、相変わらず重力弾を乱射するだけ…

飛んできた弾が…神社に…

「「あ（ア）…」」

物凄い音を立てて、崩れる神社…

『……………じ…神社が…私の神社が…許さん…許さんぞお！五体バラバラに切り刻んで宴会の料理に出してやるよお…！今死ね…ここで死ね！骨まで碎けろお……』

『ま、待ちなさい靈夢…』

怒りに身を任せ、走つてぐる靈夢君…ん？キーワードを変更してみましょつ…

【WX ウエザーエクストリーム 博麗の巫女 CX 撃破】

…ヒットした！

「靈夢君、じばらぐでいいので、CXの再生能力を封印してください」

「ええ、今なら何でもするわよ、神社を壊した罪は重い…！」

そこまで信仰心が…

「修理費が物凄いじゃないのよ…？」

全く無かつた

「では、一、二、三、で行きますよ…一、二、三…」

直後に、クレイドルの動きが止まる、いや、再生能力を抑えられ、データを貯蓄出来なくなり、自壊し始めている、無限アーカイブの

データ量は半端無いですからねえ……数秒に一億と増える事もある
そこに更に攻撃を入れる、

すると、クレイドールは碎け散る……が、中身の緑色の情報の塊が私
を飲み込む

「オ……ネエサマヲクルワセタ……アナタダケハ……コルサナイ……！」

くつ……段々と体が消えて衣玖……違う、行くのが分かる……

意識は暗闇へと……

数週間後

……あれ以降、井坂先生は行方不明だ……

残つたのは全壊した博麗神社、まるで、井坂先生が死んだ事を思い
浮かばせるように配置された、ウェザーメモリ、……絶望している
靈夢さん

村の人々も悲しんでおり、村の中心には、【井坂深紅郎】と彫られた像も建てられた

……崇められすぎだろ？

しかし、私もかなり困つている、朝食と、毎日来る空さんの相手だ
空さんも探し回つてているようだが、一向に見つからないとか、
彼女の場合、何処を探したか忘れて、ずっと同じ場所を探してそう
だが……

「……朝食、誰が作るんですか……」

空さんが井坂先生に好意を持つてているのは分かつていた、だから私は身を引いた、というか空氣だった

……違う、身を引いた

蓬萊人に無理矢理したのも、自分より早く死んで欲しくないという
エゴだ

「……井坂先生……私、ずっと井坂先生の事が……」
「いやー失礼、遅れましたね……あ、続けていいですよ、少し休眠したいんで」

！？

「ちょ、ちょ、死んだんじや……？」

「懐かしい部屋だ……ああ、無限の可能性[.]」

「悲しんで損しましたよ……」

「おおおお！これはウエザーメモリ……！ああ、寂しかつただろう？ただいま、ウエザー……」

「無視すんなやアアゴルアアラアアアアアア……」

「ゴフエツ！？先に……地獄で待ってるぞおおおおお……！」お

や、文君じゃないですか、何時から居たんですか？」

「最初から居ましたよ！？っていうか、人を散々心配させといて、何か言う事無いんですか！？」

「え？ああ……主人公は遅れてやつてくる……」

「確かに、私達には長い時間でしたけどねえ！読んでる人達からしたら32行目ぶりですよ、一分くらいしか立つてませんよ！？」

「口ア、メタはやめなさい、メタは、作者の文章力不足でそうなつてるんですから、特に描写が下手」

「自分もメタつてるじゃないですか！」

：

「何で生き返ったんですか？」

「おや、君にとつては死んでたほうが良かつたですかね……？」

「べ、別にそつとは言つてしませんよ……」

……面白いなあ……

「で、何故生き返ったか、でしたつけ……？それはですねえ……」

（医者、思に出し中）

「…此処は？」

「死後の裁判所とでも思つてください、今から貴方が白か黒か裁判しますから」

一対一で話をする、

身長は私の腰ぐらい

右手には…あの、聖徳太子とかが持つてそうな…アイスの棒みたいな奴

容姿は…よく、閻魔大王が着ている奴…

閻魔？

「え？死後？あれ？私死んだんですかね？」

「ええ、死にましたよ」

なん……だと……？！

「では、白黒はつきり裁判を始めます」

なんだ、その可愛い名前は…

「はい、貴方は黒ですね黒、もつ黒以外考えられませんよ、地獄に落ちなさい、G o t o H e l l」

酷いですねえ、一秒も経つてませんよ、適当にも程がある…

「ちょ、ちょっと待つてください！一応医者ですよー？」

「助けた命の倍は人を殺してますので、黒確定ですよ、愚か者が」「べ、弁護士を！弁護士を呼べー！」

「死人に弁護士は要らない…」

「待ちな！俺が居るじゃないの？」

声の方向には…

「あ…あれば…！…第三話で出てきてすぐ死んだ北岡宗一君…！」

「黒を白に変える、スーパー弁護士、北岡宗一とは俺の事よ、井坂先生、弁護してやるから、少し待つてな

複線…だつたと言つのか！？

「まず、最初に…井坂先生は蓬萊人だ、死ぬわけがない、よつてこ

れは何かの間違い、無効裁判だ」

「…気づかれましたか…そうですよ、無効裁判ですよ、…」

「まだ、裏に何かあるな……？さては、戦力として井坂先生を所持する気か……？」

「……」

「残念だが、その事を俺が少しでも広めれば……アンタは全ての勢力から一斉に攻撃を受ける」

「……クツ……」

「井坂先生は誰の物でもない、そう、俺の物」「意義有りツ！！私は貴方の物でも無いツ！！」

「なんて事を言うんだ……」

「……分かりましたよ、三途の川を歩いて渡つて帰つてください」「あの川つて……水深が……何メートルあるか分からんでしょう……」

「貴方の罪が浅ければ大丈夫ですよ」

「……」

とりあえず医者、移動中……

「……待つてください、待つてくださいよ、なんでこんなに流れが速いんですか！？」

「ええ、昨日の嵐で洪水に……」

「嵐！？」

（回想終了）

「ちょっと、凄い微妙なところで回想が終わつたんですが……」

「気になつたら負けですよ、文君、とりあえず……朝食を取りましちゃ、空腹ですし……ね？」

私は……幸せだ

…お疲れ様でした、第一部、完、となりました
第一部は…戦闘が少ない…ような…少なくない…ような…
まあ、そう言ひ事です！

「タイムだ氣を付けろー反省会……か？」（前書き）

絶対、やるやね、こいつは話

Fタイムだ氣を付ける／反省会……か？

…ふう、終わった、第一部が終わりましたね…
フフフ、此処までくれば私の勝ちですねえ…
なんたつて、第一部はドーパントが一切出てこないという噂ですし…
もう…存分に診察できるでしょう、ああ、楽しみだ…
「甘い、甘すぎますよ、井坂先生、蜂蜜に浸したワッフルより甘い
です」

甘い、それは甘すぎる、食すだけで歯が痛そうだ

「…誰ですか、貴方は…」

私の目の前に現れた…顔は黒頭巾を着用して、服装は黒装束、声にはボイスチェンジャーが掛かっている

「私は、もつとも存在してはいけない存在、自分自身が禁忌、自分自身が自虐ネタ、自分自身がメタ…そう、私は作者だ！」
…なるほど、大体分からない

「で、何の用ですか？」

「いや…ね、一部終わつたし…裏話とか…や…」

「無いじゃないですか」

「あ、ありますよ！一個ぐらひ…」

「無いじゃないですか」

「畜生無限ループか！」

…まあ、聞いてみますか

「…それは冗談として、何があるんですかねえ？裏話」

「ああ、あるよ、当初の設定では井坂先生を女体化する氣だつたん
DA 皆も一度は考えるだろ？…」

考えないですよ…

「でもさあ、今氣が付いたら、それは井坂先生じゃない…よつてそ
のままに…」

「そうですか…」

「あと、モツ『一』さんが使つてた共同スペル、あれももつと活用したかったんだけど…悪い、ウェザーが強すぎた」

「でしょうね、というか戦闘シーンなんて無かつたじゃないですか」

「…だって…東方のキャラクターってさ…一部は、凄い攻撃方法分かりやすいんだけど…他の人、分かり難いじやん、たとえば…さとりさんとか…あれ、相手の心の中にある強そうな弾幕を撃つてくるつていう設定だと自己解釈してるんだけど、あれじやん、井坂先生、トラウマとかなさそうじやないですか」

「ありますよ、幼稚園の頃、溺れました」

「弾幕じゃないじやないですか…」

確かに

「次に…あれですよ、ナスカ…最初はですね、妹様がナスカとタブーもつて、正常時にナスカ、発狂時にタブーって設定があつたんだけど…悪い、めんどくさかった」

「死になさい」

「…というか、後半空氣だし、イラネ…」

「空氣と言えば、文君も空氣でしたねえ、桜君も」

「ああ、居たんですよ、神社の屋根裏とかに…」

「分かりにくいですよ、というか、それは文章では分かりませんよ」「画力が欲しい…」

「後は…射命丸さんにトライアルを持たせるつもりだつたけど…」

「空氣だつたでしたから、いらないと」

「YeS」

「面倒くさいだけじやないですか」

「そ、そんな事は…大有りです」

「暖かい感想が多いんだよね」

「確かに、しかし…お気に入り登録が増えないのは…」

「やつぱり、井坂先生が人気無いから…」

「貴方の文章力不足ですよ」

「な、何を言うんだ！ 井坂先生で検索してみる！ 評価は一番高い！」
「そりや、私を主体とした小説なんてむしろ一個も無いですよ」

「...れみりや + 霧彦ライブ」

「あれですね、作業中ずっと東方スイーツ（笑）…を聞いていたのが間違いです」

一 洪脹美味しくしてす

「井坂先生さ、原作見ると、もつと人を馬鹿にしてるんだよね」「ああ、確かに、虫けらだとか言ってましたねえ…」

「黒だ、あんた」

「井坂先生さ、最近マジメに生きてるよね」「ガイアメモリも充実しますし、なんていうか…欲しいゲームが手に入つて飽きてきた感じですね」

「しかし、やはり… 罪の無い人生はスパイスの効かない料理のようですねえ…」

「そうですか…」

結論『井坂先生は不滅』

「タイムだ氣を付けろ／反省会……か？」（後書き）

あ……あれ……？この話……要ら……いえいえ、必要ですよ？
実は、活動報告で地獄兄弟の幻想入りを計画してたり……

更に燃え続けるM／あいつが帰ってきた（前書き）

アルビノってや、アーメとかだと凄い持ち上げられるけど障害とか多くて短命、周りからも気味悪がられる（特にアジアなどでは黄色人種が主な地域）、いい事は全く無いと言つてもいいらしいですよ

井坂先生とかは実験台として好きそうだけどなッ！－

更に燃え続けるM／あいつが帰ってきた

紅魔館

不味い、非常に不味い… フランちゃんにテレビの話を… というか、時代が遅れているこの館の住人にテレビの話をしたのが… 不味かつた… !

「ねえ、買ってきて頂戴、河童辺りから」

「そうだよ、買ってきてよ… !」

朝からずっとこの調子だしね…

「さ、咲夜ちゃんに頼」

「私は交渉が苦手なので無理です」

だろうね… 日頃から出会った人間にはすぐナイフ投げるし… もう一種の人見知り…

「… 分かった、買ってこよう… ハア… 不幸だ… ?いや、待てよ… これは… レミリアちゃんとフランちゃんから期待されてるんだ… !… よし… 行くしか無いな… !

人里

いやあ… 困りましたねえ…

医院に来てみれば…

「さあさあ、人間の皆さん御覧あれ、これこそ外の世界で流行している『プラズマテレビ』… !

玄関前で河童がテレビを売っていた

… 何故?

『ふらすまでれび、つて凄いのか… ?』

『いやあ、河童の言う事だ、嘘かもしねえぞ』

「そこの人間の貴方！嘘ではありませんよ！このテレビは河童達が

研究に研究を重ね、2000年もの年月を掛けて作成したテレビです！」

「中国二千年の歴史……？」

『嘘だな』

『いや、待て、河童だ……二千歳くらい生きててもおかしくないぞ？』

『何言つているんだ、あの河童、現代の言葉で言つと『ロリババ子』つて、いう奴だろ？』

『ばつきやろー、多分ロリババアなんだよ、ロリババア』

……ここまでそんな言葉が……

一体何処から……？

『ええ？ロリババアってあれだろ？（井坂）先生が言つには紅魔館の吸血鬼とかだろ？』

私でした

「……まあ、二千歳は嘘として……実は三ヶ月だよ、三ヶ月」

それは短すぎる……！

「分かつた、買おう」

一人の男が前に出て行く……黒いスースに一点だけ血のようだに真っ赤に染まつたスカーフ……

尻……霧彦君……！

……というか、何故日の光りを浴びて死なない……！？

「毎度あり……、さあ、このテレビ！在庫は後5台！重くて持つて来れなかつた！」

五台持つてこれただけ凄いとりますが……

『おい、あれ……たしか紅魔館の吸血鬼と婚約した婿だろ？』

『確か……かなり優秀な人物だと聞いたぞ……？ロリコンだが……で、やはりあれは……』

『……本物……！』

ロリコン……そうですが、一体誰

『（井坂）先生さあ……ロリコンとかさ、何処の言葉なんだろうな？』

『外の言葉なんだろ？、さあ、買おうぞ……』

…私でしたねえ…

紅魔館

しまつた、コンセントが無い、この館

「コンセントが無い…！テレビが見れない…！そんな…！」

「まあ、そんな事だと思ってたけどね～」

レミリアちゃんは死ぬほど落ち込み

フランちゃんは…大したショックも受けていない

…絶対姉妹逆だ…

「レミィ、泣かないで、私が何とかするから…」

「な、泣いてなんかいられないわよ…何を言つていいのパチュー…？」

…泣いたのか…

「……用は電力が必要なんでしょう？」

「まあね」

…というか、あの河童…絶対批判受けるだらう…コンセントテレビ…とか
電気さえ無いのに電化製品を売るなんて…

「…できた」

何故…？

「さすがパチュー！私に出来ないことを平然とやつてのける…そこには
痺れる憧れるう！」

…テンション高っ

「まあ…とりあえずチャンネル回すか…」

1ch

【カ～パネットカパネット～夢のカパネットにとり～】

…なん…だと…

2ch

【今回～】紹介しますのは～】

…ば…馬鹿な…！？

3ch

【「のー！絶対に死】
じょ…[冗談じや！

4ch

【なない、サンドバ】
ありえない…！

5ch

【シク、藤原】
ふざけるなよ…！？

6ch

【妹紅ー】
！？

7ch

【無論】

8ch

【ダツチ】

9ch

【ワイ】

10ch

【フ】

11ch

【として】

12ch

【も、使えますーお値段はー、なんと…】**【 パ パ パ パ パ ー！】**、失礼…
なんだよー？！今、配信中…？商品が逃げた…？畜生ー何やつてん
だ！役立たずが！そこで首でも吊つてろー】

「…クソッ！やられた！」

あの河童め…絶対に許さん…！

「…んな馬鹿げた商売を…！？…そつか、馬鹿なのか…！？」

あのテレビ、やはりまともな商品では無かつたようですね…というか、絶対あの河童…自分でガイアメモリとか作ってますよね…というより、絶対毒素にやられてる

「次の方どうぞ~」

入つてくるのは…尻…霧彦…君

「おや、珍しいですねえ、どうしましたか?」

「その前に一つ聞かせてくれ、…外に同じような妖怪が大量に居たのだが…あれは…?」

「ああ、あれですか…あれはですねえ…まあ、なんというか…」

「正直に話したまえ」

「白玉楼から靈を提供してもらって、それに空君の能力をガイアメモリ化した物を

挿し、実体化させたガードマンですよ」

「…人手が足りないからか…」

「そうですよ、それと…此方も一つ質問を…、貴方、何故日光に当たつて平気なんですかねえ?」

「ああ、それは…1／4ナスカメモリで1／4人間で1／4幽靈で1／4吸血鬼だから、日光のダメージよりも回復力が勝つているんだ」

「…そうですか

「…で、何の用ですかね?」

「ああ、河童の居場所を教えてくれないか」

「川でしきう、胡瓜でも置けば簡単に捕まりますよ」

「ありがとうございます…じゃあ…まずは爪を全部剥がす事から始めないと…相当怖い事を考えてらつしやる…」

「…よし、お礼に言い事を教えてあげよう、後ろに氣を付ける」

「…言つて、即座に逃げ出す

「…一体何…」

後ろから炎

どう考えても不死の人だ

ひ、久しぶりですねえ、妹紅君……」

「えーーー確かに久しぶりねえ、散々人の体で実験した拳句河童に売り渡すとはあ…その命！神に返しなさい！」

不味い、
不味すぎる……

そのうち何処かの金持ちの家に売り渡されて一生閉じ込められたままになると思ったのですが…！

「フフフ… それに面白い物も拾つたのよ?」

MAGMA

直後、彼女は右手は赤いノモリを握り、そして、右半身だけ、高温で焼け爛れ、それを赤く塗りつぶし、固体化させたような姿へ

……私も不死なんですがねえ……

更に燃え続けるマーケットが帰ってきた（後書き）

いや、ジユノルさん硬すぎですよ、チートじゃないですか
その硬さを半分でもいいから蟹刑事にあげて欲しいのです

更に燃え続けるM／幻想郷は今日も平和です（前書き）

実は某動画サイトで井坂先生のMAD作つてたりします
楽しいよね、MAD作り

更に燃え続けるM／幻想郷は今日も平和です

火災ですよ、火災

「ちょ、落ち着いてくださいよ！妹紅君…ここは病院ですよ！」

先ほどから溶岩弾を乱射して暴れまわる妹紅君、井坂医院が半壊だ！

「お前が作り出したのは病院なんかじゃない…人を実験台にする地獄だ！」

人は実験台にしてませんよ、人は

しかし困った…メモリは医院の中だし（not 性的）…打つ手無し、ですか…

とりあえず死にはしませんが、痛覚はありますしねえ…どうしたものか…

「ああ、ちょこまかと！動くと痛いわよ！？」

「動かなくても十分痛いで【シユゴツ】！？」

右足が吹き飛んだ、無論転倒

『それはそれを掛けます。 ウィルはそれをセキュリティリスクに適用することになります 教師に。（しまつた！危険人物に当てるつもりが先生に！）』

『U - 13行われること。（U - 13！何している…）』

「馬鹿野郎オオオオ…複製達ガードマン！誰を撃つている！？ふざけるなア

ーツ…！』

複製した空君達の射撃でしたか…！！

本人並みのノーコン…！！

というより、彼女（？）達は言語回路がまだ安定しないので何を言つているのか分からない…！

「受け取つてくれ…私の憎しみと憎しみと憎しみのオブマージュ…

！」

巨大な溶岩弾が現れ、徐々に巨大化していく…

不味い…このままでは…！！

「待つて！井坂先生を殺さないで！」

草陰から姿を現したのは…あれは、夜雀のミステイア・ローラレイ君…！

「お願い！殺さないで！」

更にもう一人…あれは…リグル・ナイトバグ君…！

「？」「殺さないでくれー」

更にもう一人…あれは…ルーミア君…！

「何故止めるのよ！？」

まさか…私を庇つ

「…私が殺すからだ…」「…

どうせそうだと思ったよ！畜生！

「まずは目からくり抜いて…！次に内臓を…！」

やめてください、本当に、ミステイア君

「いやいや、全身に人食虫を張り付かせて…」

もつとやめてください、リグル君

「頭から行っちゃおうよー？」「

死ねるならそれが一番いいんですけどねえ…

「…というか、何故足が回復してるの？」

妹紅君が問い合わせて来る、確かに、気が付けば右足治つてますねえ…

あ、そうだ、妹紅君に蓬萊人になつた事話してないですね

「実は、私も蓬萊人なんですよ」

沈黙

「ごめん、聞き取れなかつた」

「私も蓬萊人なんですよ」

沈黙

「嘘だそんな事ーッ！…」

「いや、本当ですよ、ミステイア君」

「嘘だッ！」

「本当ですよ、リグル君」

「ナイスジョーク、だな」

「ジョークじゃないですよ、妹紅君」

「そーなのかー」

「そなんですよ」

「あ、屋台出さないと…」

「ミスティア君が去つて行く

「ん、この時間帯なら近くにチルノが居るな…遊ぶかなあ」

「リグル君も去つて行く

「…月の無い夜道には気を付けるつてね…！」

「すみません、謝りますから出来ればもう会いたくないです、妹紅

君…

「…」

顔を見合わせるルーミア君と私

可愛いなあ

ツハ！？いかんいかん、子供をそういう田で見るんじゃない私

「…？」

視線に気が付いたのか首を傾げるルーミア君

駄目だ、可愛い

抑える…抑えるんだ…私

「私は井坂先生が好きだぞー」

持ち帰つてしまおうか…？

よし、まともな理由を考えるんだ…！考えろー私！（崩壊中）

「今日、鍋にするんですがね、来ますか？」

「行く行く～」

釣れたッ！！

「んじゃ、行きましょうか…」

「いいけど、病院はいいのかー？」

背後

半壊の私の医院

…………

「ええ…まあ、明日なんとかしますよ…」

目を離した隙にルーミア君が居なくなつたら首吊り物だ…
このチャンス…逃がさない！

『ルーミアを性的対象として見るまで…それがお前の絶望へのタイ
ムだ！』

！？今照井竜の声がしたような…

一方…何処かの血で染まつた真つ赤な川

「も…もう許してえ…」

「許さん、貴様だけは許さん、絶対にだ」

「あ、あのテレビを売つた事に付いては謝るよー！」つちだつて経営
難だつたんだよ…」

「知るか、貴様の事情など…重要なのは貴様の死で私の怒りが收
まるか收まらないかだ」

ボロボロで半分以上死んでいる河童に

詰め寄る青い騎士のような姿の妖怪…ナスカ…もとい霧彦

「や、やめてくれえ！私達は盟友だろう？！」

「知るか…よくもあんなキチガイテレビを…」

「わ、わかつたー！まともなテレビを一個あがむからあー…」

「…本当だな？」

「！」これだよー！地デジにも対応してんー…」

紅魔館

「新しいテレビを貰つてきただよ」

「さすが私が認めた男ね…」

フフフ…私の株上昇中…

100

【カ～パネ】

「畜生あの河童がああーー！」

即座にテレビに回し蹴り

更に燃え続けるM／幻想郷は今日も平和です（後書き）

幻想郷に住んだらロリコンにならざるを得ない

「が足らない／氷結娘？」（前書き）

原作の一話あたりのアタッシュケースの中身のメモリに…意味の分
からない物があるんですねえ、ジャズとか…
何がしたい、ディガルコープレーション
何がしたいんだ…ディガルコープレーション…！！

工が足らない／氷結娘？

ああ、鍋が楽しかったなあ…

桜君が泥酔して暴れまわつたり
桜君が泥酔して暴れまわつたり

最終的にはルーミア君に食われたり…
いやー楽しかった

寝付こうと思つたら布団に妹紅君が立つており…死に掛けたり
撃退し、寝ようと思つたら、フジヤマヴォルケイノが飛んできたり…
正直、楽しいというより疲れた

…なんて事を考えながら医院に来てみれば…
見事に凍り付いていた

…何故？村人の手によつて僅か三時間で完成した医院を何故…？
誰だ…！？誰だ！村人の努力の結晶を凍りつかせたのは…！

「お、井坂先生…凄いよね、これ、先生の作品？」

物凄い質問ですね、空君

「いや、色々と突つ込みたいんですけど…」

「ちょ、先生、朝から突つ込みたいとか下ネタ自重してくださいよ…」

…もうやだ、この八咫烏喰い地獄鴉

「誰か、これの犯人を知りませんかねえ？」

思わず独り言、許さん、絶対にだ

「恐らくチルノ辺りだろう」

思わぬ回答、この声は…！

「おや、慧音君でしたか…おはよづ！」ざいます」

「ああ、おはよう」

挨拶しないと死ぬ、あれは死ぬ、何かは言いませんが、死ぬ

「おはよー！」ざいます、今日も涼しい雨天ですね」

意味が分からぬですよ、空君

「涼しい雨天…？今日は…涼しくも無い雨天だぞ？」

「え？ 嫌な雨天つて言わなかつたつけ…？」

「（慧音君、まともに相手をすると疲れるので、あまり考えずに相手をしてやってくだれ）」「

「（…分かつた）」

自分の喋つた事も忘れるつて…

「で、元の話に戻しましょう…チルノ、とは一体…？」

「ああ、霧の湖に住んでいる妖精だ」

「妖精…」

「幼精…」

…空君、若干違わないでしようか…？

「しかし、確かに妖精は人間以下の存在では…？こんな事できるはずが…」

「確かに、普通の妖精、ならばな…だが、チルノは違う…普通の妖精の何倍もの力を持つている」

「そーなんですかー

「よし、ならば…潰すまで…！」

「…まあ、貴方なら大丈夫だらう…しかし、此処までの事は今まで一度もした事が無かつたな…井坂先生、何か彼女にしたか？」

「…いや…別に…？私が手を出したのは夜雀と蛍とルーミア君だけで…そうか、リグル君はチルノと遊ぶか…みたいな事を言つてましたね…復讐…ですか…フハハハ！くだらない！何処かの刑事を思い出しますねえ、蟹じやない奴」

「井坂殿、貴方を一発殴らせてくれないか？」

…怒つてますね

「なるほど…だが断る、この井坂深紅郎のもつとも好きな事の一つは【テュクシッ】ゴはッ…？」

…痛すぎる…！これが子供を守る教師の力か…！

「…は、始めてですよ、女性に打たれたのは…いや、始めてじゅありませんね…妹紅君とかから何百発と貰つてますね…」

正直勘弁してほしい

「…妹紅に何をした？」

不味い、一方的に私が悪い事になつていて…（超正論）

「いえいえ、少し、蓬莱人の耐久度のテス【デュクシッ】ぎやあ…」

痛い…これが…親友を守る教師の力か…！

「そうか…分かつたよ、井坂先生、私の核の炎で氷を溶かせば…」

「やめてください、普通の人間は近寄れなくなりますよ、それ」

…どうか、そんなに火力調整できないでしょ…君…

…そういえば、ガードマンは一体何をやつていたんだ…？

昨晚、眠れなくて言語回路を調整したガイアメモリ…いや…違う…

なん…だと…

これはガイアメモリじゃない！ただの制御データやら色々超科学力

の詰まつたメモリだ！

…まあ、ガイアメモリでいいでしょ…

地球の記憶とか全く詰まつてないですけどね

『…なんてこつたい…おい、U-11お前が宴会やうづぎーとか言つて夜間警備サボつたらこれかよ』

『ハハハ、俺の責任じやねえよ、連帶責任だ』

『正論だけよお…』

…宴会？

…どうか、何故男言葉かというとですね…

細かい部分は設定できなかつたんですね、いやー失礼

ディガルコーポレーションのオリジナルの器具とかあれば出来ます
けどね、河童の複製品ではあれが限界なんですよ

…？

何処で言葉覚えた…？

「おお、昨夜宴会に押しかけて来た妖怪じやないか！」

『お、おやつさん、早いですね』

…あれ、名前は分からないですけど、私の信者一号じやないですか

「しかし…見た目はいいのに言葉がな…誰に教わったんだい」

『風都を駆け巡るハードボイルドな人、つて言つてましたけど…あ

りや、ハーフボイルドだな』

左・翔太郎！

いや、落ち着け……そんなはずは無い……なんせ、奴が幻想入り（外の世界から来る事を言つらし）するはずが無い……！

『いやあ、スキマ妖怪の結界も脆いものだな……俺達が力を合わせれば簡単に穴が開く』

『ええ？ 確かに……そりや、空君と同等の力ぐらいにはなりますけど……』

『おい、この制御棒見ろよ、トリガーのメモリの改ざんデータを適合した新型だぜ？』

『お、格好いいなあ、俺にも貸してくれよ』

『んじや、一日交換な、お前の……たしかメタルのメモリの改ざんデータを適合した奴だらう？』

『そうそう、50mmの鉄板ぐらなら折り曲げられるぜ』

…

おかしい、私の田には自分達で新化し続ける複製達^{クローネ}が見える……！

「何故だらう、私のクローンなのに凄い頭がよさそうな気がする……いや、決して私が馬鹿だと認めた訳じゃないけど……」

空君、落ち込むな、あれはもう君のクローンではない……

一種の妖怪だ……

『しつかしなー……井坂先生が生前凄い悪人だったとはなあ……』

『ばつきやろー左が悪人だろ、絶対、俺達が宴会していたら【ドーパント……？】って言い出してさ、一応会つてるから【Y es】って答えてみれば……殴りかかってくるんだぜ？』

そりや殴られますよ、やつぱり馬鹿だ、こいつ等
「貴女達、宴会は楽しかったんですねかねえ？」

『『『おはよう』』ぞいます、井坂先生、何用でしうか？』』

『遅い、遅すぎる、猫被るのが、やつぱり馬鹿ですね』

『いや……バレてますから、もう、思いつきり聞こえましたか？』

『『『悪いのはコイツですー』』』

それぞれの顔を指す複製達……もつ駄目だ、こいつ等

「どうか…確か、君達20体ほど居たはずですが…今居るのは…」
彼女達の右腕に一応シリアルナンバーの刺青があるので、一応確認する

【U-11】

【U-20】

【U-03】

…一貫性ねえ…

「他は？」

『ただいま、太陽の烟を侵略中です』
何やつてんだ！？』いつ等

「…何故？」

『あの地の土は栄養が十分にあるので、村を作るのに最適だと』
何の村！？

『何の村、とお考えですね、簡単ですよ、我々の村ですよ』

怖い、怖くなってきたぞ

『安心ください、職業の選択肢の一つに病院のガードマンも入れ
ときますよ』

…ええ？

【本部！本部に連絡！四季のフラワーマスターと交戦中！援護たシヨゴツ
ザザザザ】

『…U-12が死んだ』

『嘘だろ…！？相棒が死んだだと…？…』

【ハアツ！ハアツ！畜生…！好き勝手遣りやがってええええ…！…】

【あんた達ねえ、人の庭に勝手に攻め込んできて何言つてるのよ…？】

【おい、U-109！？何をやつている？！】

【ファングだ…！ファングを使うしか…！…】

待て、色々と突つ込みたいのですが、とりあえず、U-109って
何ですか、U-109って

『実は、我々の生産ラインが安定しまして…U-1からU-20ま

でを靈を媒体としたオリジナルと呼び、U200は、薬物とオリジナルの単細胞を媒体としたセカンドシーズンとして…

『そして、実を言つと…U-01が奇跡的に紅魔館のメイドの能力

をラーニングに成功し、我々は、すでに一千万年ほど経つているんですよ…その代償として、01は能力を使い続ける為だけの機械と貸しましたがね…』

『アイツは英雄だよ…ファーストプラン（U-01～U-03）の一人として鼻が高い』

駄目だこいつ等、ここより学園都市…?とかに行つたほうがいい、絶対に

【クソツ！撤退だ…！逃げるぞ…！】

【待ちなさい、私は基本的に深追いはしない主義だけれども…今回ばかりは…！怒りが収まらないわ…！】

【ち…！畜生！此処までか！】

【大丈夫だ…俺に任せてくれ…！見つけたんだ…ファンングを…！
【ば、馬鹿野郎！ファンングはオリジナルの為に作られた試作品だぞ！？セカンドの俺】

【ここで俺が犠牲にならなきや 全員が死ぬんだ…！俺一人を犠牲にしてお前らを救えるならそれでいいんだ！】

【クソツ…！いいか、英雄なんて呼ばないからな！？お前はただの

馬鹿野郎だ！】

【ケツ…うるせいやー、さっさと逃げろよ…】

【…生きて帰つてきやがれ…！】

【死ぬとでも？】

【…馬鹿野郎が…】

…え？何？何なんですか？ちょっと、チルノとやらを懲らしめに行動としてみれば、いつの間にか違う話になつていて…

『109…彼女は優秀だつたな…、歌を送ろつ』

『ああ…！』

一千万年も経てば男言葉が馴染むだらうよ、そりや

I'm a thinker.

I could break it down.

II
m
a
s
h
o
o
t
e
r
.
A
d
r
a
s
t
i
c
b
a

6

A
g
i
t
a
t
e
a
n
d
j
u
m
p
o
u
t
.

Feel it in the will.

Can you talk about deep-sea

With me.

The deep-sea fish loves you forever.

1

w a i t s
t h e r e .

Sound of object. They played f

C 10

お疲れ様でした。いやこれが国語でなくてはいけないと思いま

以上、國歌、Thinkerでした。

目だ、私の手に收まらない、この人達……

ういいや、今度相手しよう、とりあえず… チルノとやらを… ね

元
?

Iが足らない／氷結娘？（後書き）

Thinkerは神曲ですよ、神曲、あ、亡き女王の為のセブテツ
トも神曲ですよね、Sweets Timeも神曲ですよね、ああ、
もう、全部神曲でいいよ！
：風都タワーとかも神曲ですよ、超神曲、まだ人類には早いですが
ね

エが足りない／＼のままでは井坂先生の寿命がストレスでマッハなのだが…（語

ウェザー！ウェザー！助けてウェザー！

直挿しするガイアメモリ～

最初では井坂先生の女体化の提案もあつたんですけどねえ、
それ、井坂先生ちやう！永琳や！となつてしまつたために無くなりま
したねえ、残念

というか、女体化井坂先生に（メモリを）直挿しするつていうのが
表現的に危ない

追記：ええい、深夜に書いた所為で文章が滅茶苦茶じゃないか！…
え？元々滅茶苦茶…？

「が足らない」このままでは井坂先生の寿命がストレスでマッハなのだが

見つからない、何処だ？何処にいる…チルノ、とやら…？

「…見つけたら…どうしましょつかねえ…脳に直接スタンガンを繋げて焼いてみるのもいいですねえ…それとも…大型電子レンジの中に入れてやりましょうか…？…いや、許しを請つまで皮膚を縫つてやりましょうか…？」

私は正常ですよ、ええ、物凄く正常です…

とか考てる内に面白い物を見つけました

サイドに縁の髪をまとめ、背中からは虫の羽のような物が生えた人物…！

確か名前は大妖精、でしたかねええ？何でも瞬間移動の能力を持っているとか…！…

捕まえて空メモリのver2、大メモリでも作りますか、それで複製達…何か名前を付けますか…

…量産型アヴ…アダム、アダムで行きましょう、それでver2はイブで確定ですね

フフフ、広がる想像、楽しみな世界

さあ、さつさと捕獲しますかね…

【W E T H E R !】

私の姿はエクストリーム体ではなく、普通の形態、あれから色々と試してみましたが…

よほどテンションが上がらないとなれないようですね、つまり、変身にはプリズムリバー姉妹の一人が必要ですねえ…

「フフフ…大妖精イー！あアそびましょオう…！」

不味い、エクストリームするかも知れませんね

「ひやあ！？変態！？」

「誰がロリコンですか…！」

「え…いや、だって…絶対ロリコンじゃないですか…！」

「……ほおう、覚悟は出来ていいのうだ、ならば、容赦は要りませんね……！」

少し頭に血が上ったので、雷を落としてしまった…
消し炭になって無ければいいですけどねえ…

「…か、雷？」

まあ、避けてますよねえ？

「他にも、こんなのがありますがねえッ……！」

両手から熱光線を乱射する、それも簡単に避けられる

…そうだ、いかんいかん、捕獲するんでしたねえ

私は腰に装着されていた私専用の武器、ウェザーマインを右手に取る
武器があるメモリというのはレベルが高いメモリという証であり（
以下略）

つまり、この世のドーパントと妖怪と神は私に診察されるべきなん
ですよ

此方が診察してあげましょ、と言つてはいるのに断るとは…

まあ、さておき…

とつあえず、右手のウェザーマインで、大妖怪を捕獲、直後に微電
流を流す

瞬間移動といつのはですねえ、集中しないと多分できないんですよ、
なので、本人には感知出来ない程微量の電流を流し、集中力を切ら
す、なんと完璧な…！！

「フフフ…捕まえましたよ…、そうだ、君、チルノ、という人物を
知っていますかねえ？」

興奮の余り当初の目的を忘れる所でした…！！

「…し、知りません！」

…嘘だッ！

「素直に話したほうが楽じやないですかねえ？！」

ウェザーマインの電力をあげる、大体気絶する電力の1／3ぐらい

「ツ…？くあああああ…？」

体をビクビクと痙攣させ、涙目で悲鳴をあげる大妖怪、

「もう一度聞きましょう、チルノ、という人物を…」
いい掛けた瞬間、巨大な氷塊が私に向かって飛来した、冗談じやがない

「くつ…！？氷塊…！？」

「大ちゃんから手を離せ！ロリコン！」

またロリコンって呼ばれたよ（笑）

「何故私の邪魔ばかり…！許せん…！！」

目に写るのは、背から氷で作成されたような翼を生やした、幼…

少女

「君がチルノ…君、ですね？」

「そーだ！」

「よつしや、殺す、絶対殺す…！…コイツは殺さないと駄目だあーつ…！」

ゼエツテエー殺さないと駄目ですよ、ねええ？

「…あのさ、何であたいたがアンタに恨みを買われてるのさ」

…？相当頭が悪い子なのか？バカですね、バカ

「それは当然…私の医院を氷結させたからですよ…」

「…はあ？」

はあ？って…あれ？もしかして勘違…

「そ、それは有り得ませんよ、だつて、チルノちゃん、昨晩、妙な人に焼き消されましたから」

「あの屈辱は絶対に忘れない…！…」

焼き…消された…？

凍結した井坂医院＝私に憎悪の念を抱いている人物＝凍結能力があり、尚且つチルノ以外、そして、炎も扱える＝そのような多彩の能力の持ち主は私の知り合いには居ない＝恐らくガイアメモリを使用した＝では、炎がガイアメモリか、しかし、マグマは私の手元にあるため違う、よつてガイアメモリは氷結能力＝私に憎悪の念を抱き、尚且つ炎を操れる人物＝

藤原妹紅

あの不死野郎……！メモリはアイスレイジですか……！
今頃一体何処に……？！

「ふ、フハハハ！ざまあみろ！井坂深紅郎！」

背後からの声、見つけました……！

「貴女でしたか……！絶対に許さん……！」

「ハハハ！私がお前みたいな奴に捕【落雷】つ！？」
殺せないならまず気絶させ……

調教すればいい……！

まずは電磁パルスを精神に埋め込んで、
2度とまともに考える事の出来ない、ただの人形にして富豪に売り
渡してやりましょうかあ？
フハハハハ……！

：

翌日、焼死体に限りなく近い井坂深紅郎と全焼した井坂医院が発見
されたことは、誰もが知っていることである

「が足りない」のままでは井坂先生の寿命がストレスでマッハなのだが……（後

実は、ACfa×東方の作品も書いているんですよ、タイトルは東方首輪猫、興味のある方は是非御覧になつてくださいね」とつれいです、

以上異常な宣伝でした

田物語 1（前書き）

今回は本編進まないです、脇道が普通のタイトルで、本編がW風の
タイトルになつてゐる、はず
え？毎回話が進んでないだつて？『氣のせい』『氣のせい』

「えー ただいまから一百物語大会を一开始めたいとー思つたしだいでー」

「どうしてこうなつた…！？」

「そうだ、事の始まりは三日前…！！」

「百物語がしたい…」

「何言つてんですか、井坂先生、脳が腐りましたか？」

「文君、最近毒舌ですかね、何故？」

「いえ、あれじゃないですか、百物語、終わると何かが起ころうぢやないですか」

「信じてるんですか？ロマンチック（笑）ですね」

「何かした？私何かした？」

「…その台詞を鴉天狗が言うのも…それより、ここは幻想郷、何があつてもおかしくない、…ので、私は今からこいつくらさんやらなにやら、全て試そうと思うんですよ」

「そんなオカルトチックな…ガイアメモリはどうしたんですか？」

「正直飽きた」

「B型ですね？すぐに吸血鬼の餌になつてください」

「悲しくなつてきた…」

「まあ、記事にもなりますし、いいでしょう、人集めは私が担当しますよ

「あれ？意外と乗つてる？」

「ツンデレか！」

私が原因でした

「今日は一大変お忙しい所一集まつて頂き一ありがとうございます

一

運動会ですか？…何を考へてるんだ…文君は…これ、百物語じゃない
「では一選手の紹介を一

選手！？

「では一Aチーム一紅魔館チーム…」

おい、吸血鬼何やつてんだ！？

天候を曇りに設定しといてください、つていつのはそういう意味ですか！かなり疲れるんですけどね！？天候の固定！

「代表の霧彦さんに、意気込みを聞きたいと思います、どうぞ」

「…自分の妻達を怖い目に合わせるというのは心が痛むが、それでも怖がるレミリアちゃんとフランちゃんの顔は可愛いと思つんだ」
駄目だ、この霧彦…はやく何とかしないと…

「馬鹿あ！霧彦の馬鹿あ！」

「何がそこまでお姉さまを怖がらせてるのか分からないわ…」

「安心してよ、フランちゃん…すぐに泣かせるから、君も」

誰か！この中にお医者さんは…一私が医者でしたね、無理です、手遅れですね

「えー、もう貴方が優勝でも誰も文句を言いませんね…ちなみに、吸血鬼一人に霧彦一人の大変バランスのいいチーム構成となつており、優勝候補の一つです」

バランス！？というより、何ですか、その霧彦一人、つて…吸血鬼三人でもいいんじや…

「次、Bチーム一白玉楼チーム…」

本物の幽霊じやないですか、それ、なにやつてんですか

「リーダー、というより、保護者の妖夢さんにお話を聞きたいと思
います」

「正直帰りたいです…」

御尤もで、

「あら、 妖夢、 怖いの？」

「怖いですよ！幽靈ですよ！？幽靈！足が無いんですよ！？」

「私も幽靈だし、 貴女も半分幽靈じゃない」

「足あるじやないですか」

足！？足があればいいんですか！？テケテケがダメでトコトコがOK！？

「はい、 貴女達が既に怪談話です、 幽靈一人に半人半靈一人の二人構成で、 若干攻撃型かと思われます、 面白い試合を展開してくれそうですね」

「、 攻撃型…？」

「次、 Cチーム一人里チーム…」

ああ、 やつと普通…

「井坂アー！シヨック死させてやるから待つてろよオー……」

じゃなかつた、 妹紅君じやないです、 あれ

「保護者の慧音さんにお話を聞いてみたいと思います」

「まあ、 頑張りはするさ…」

「ちなみに優勝時の商品は？」

「妹紅の服…忘れてくれ、 教材だ、 教材」

「彼女だけはまともであつて欲しかつた…！」

「ちなみにチームは、 半獣一人、 不死者一人となつております…防

御型ですねえ」

「防御！？」

「そして、 最後のチームです…Dチームー井坂医院チーム、 リーダーの井坂先生にお話を聞いてみたいと思います」

「私ですか

「ええ、 なんでしょうか、 はい、 慧音君が割りと人格破綻者だったのが今の一一番怖いですね」

「はい、 肩コメントありがとうございました、 やる気あるんですか？馬鹿なんですか？首吊るんですか？」

何この怖い鴉天狗

「ちなみにチームは、変態一人に天狗一人に良く分からぬ鳥頭な核爆弾一人と、なつております、非常にバランスの悪いチームですが、トリツキーな試合が期待できますね」

試合！？

「計、十一人です」

百人集まつてねえ

「なので、十一物語となります、いい記事ができそうですね」

ええ？

「では、夜三時から再開するので、一旦解散です、話す話を決めておいてくださいねー」

何故集めた

医者待機中…

三時、なりましたね

「では、お集まりになりましたね？」

「ハハハ、レミリアちゃん、私の後ろに隠れてないで出てきなよ」

「ばつ！隠れてないわよ！身を潜めてるのよ！」

世の中ではそれを隠れるという

「では…ルールの説明をば…単純です、一人ずつ話し一番怖かつた話をしたチームが優勝です、その後、怖かつた話の投票をしてもらう訳ですが…口頭では自分のチームを投票する事は決まつて…いるので、審判にさとりさんを呼びました」

「…」んばんわ、正直帰りたいです」

でしううね、お疲れ様です、見知らぬ少女よ

「あ、井坂先生、あれが私の飼い主です」

なるほど、…全く、お宅

「『お宅の空君が毎日来て割と大変なんですよ？ちゃんとしつけてくださいよ、迷惑ですねえ』…すみません」

なん……だと……！？

「『どうして私の考えている事が分かつた！？素晴らしい…その能力…原理が知りたいですね』…褒め言葉として受けとつておきます…これは、この三つ田の田で相手の心を見透かしているんですね」
なるほど、2Pに「ソントローラーを挿せば心を読めなくなるんですね」「『よし、剥ぎ取らうすぐ剥ぎ取らう、遠慮は要らない、すぐに剥ぎ取らう、三秒だ、痛みは一瞬だ、その田を剥ぎ取つて…』やめてください！死にますから！」

「私にとつて、死など…プリウスよりも安い物ですよー」「安…安くない！」

的確な突つ込みありがとうござります、空君、だが、何故か腹が立つ

「へえ、心を読む能力か…面白い」

霧彦君、コイツは私の物だ…！！

「…ちよつと…ヤダ…何考えてるんですか…」

霧彦君…何考えて…

「や、やだあ…やめてください…そういう趣味無いですか…」

駄目だアイツ、小五口リ（悟り）に萌えてやがる

「はいはい、精神的セクハラは後でやつてください、始めますよー

十一物語

百物語…

（本編開始）

一話田…霧彦…『助けて』

あれは…私がまだ、ディガルコーポレーションの購買部に居たとき
だった…

私は、道端で落ち込む女性を見つけ、さっそくメモリを販売しにい
つた

今思えば、あの時売らなければあんな恐怖を味わう事は無かつたの

だろう…

女性が買つたメモリは、…おつと、これは関係なかつたね、この後
私が彼女に襲われ

絶妙なチームプレイで私がイキ地獄を味わうといつ自慢話…
おや、レミリアちゃん、フランちゃん、何怖い顔しているんだ、け
どそんな顔も可愛いぞ

…で、怖い話だつたね、ええと、あれは…随分前…

私は、とあるサイトで小説を読んでいたんだ、素人の作品だから、
表現力などはいまいちだつたが、素人特有のユニークさに惹かれた
んだ

…で、特に面白かつたのが、Wという半分こ怪人が出てくるんだ、
それに対し、向かうは英雄ナスカ、けど、ナスカは婚約者のタブー^{話題}
に殺されてしまつ、大変感動的な作品だつたんだ
で、その作者を見てみたら…

私だつたんだ

（終了）

「怖くねえええええええええええええ…！」

「怖い…！…怖すぎる……！」

叫ぶ姉妹

上がフラン君

下がレミリア君

…ただの自慢話じゃないか！？

「ハハハ、他にも首しかない男が追つて来る話とかあつたんだけど

ね

そつち話してくださいよ…！

「次は…フランさんお願ひしますね」

次回、紅魔館の眞の恐怖が明らかになる…！スカーレット姉妹に襲
い掛かる悪魔^{メイド}の正体とは…？

田物語 1（後書き）

ほら、私の作品つて妹紅ちゃん、壊れ気味でしょ？好きなものほど、最後には壊したくなるんです

寝込んで井坂先生と夜を共にしてこましたサー・セイン（n o t … 何も
ぬつまご）

「次は…フランをお願いしますね」

姉とは対照的に全く怖がつて無いスカーレット姉妹の妹、フランンドール・スカーレット…いや、此方に物凄い殺氣を向けているんだ、あの子…

いやまあ、勝負を時間勝ちしたりしましたけどねえ…確かに、確かに私が悪いですよ?

だが私は謝(文×謝)らない

（本編開始）

—話題…フランドル・S…『メイド』

ん、私の番ね

所で皆

スポーツはいいぞ

…いや、外に出ないから見た事無いけど、きっとHキセントリックでファンタスティックで特別な存在なんでしょう?

あれは…つい、先日の事…

館を歩いてたら、咲夜が居たのよ…で、暇だつたし後を追いかけたの、で、そしたら、お姉さまの部屋に入つたのね、んで…いきなり中から「（自重）」とか「（自重）」とか聞こえてきて（自重）で（自重）になつて（自重）で部屋に連れ込まれて（自重）し（自重）ね（自重）、（自重）（自じょ…もう無理だ）…

これで私の話は終わりだよ、次、誰?

（終）

「怖え……」

「怖いって……あのメイド……やつぱり様子がおかしいと思つたら……」「た、大変だ！規制していた自重さん（仮名）が過労死寸前だ！井坂先生！助けてあげて！」

ば、馬鹿らしい……馬鹿らしそうな……

何ですか、あのメイド娘……怖すぎますよ……

恐ろしいほどな……

ロココンだ……

いや、待てよ……？もしかして、あれじゃないか……今もこの場に居た
り……怖ッ！！

たしか、時間操ると言つ事は空間操ると誰かが言つていた……
あそこは押入れ……中に誰か居るよ……

ヤバイヤバイヤバイ……何処にでも居るつて事ですよね！？

……し、心臓が……！

「……皆さん怖がりすぎですって……」

そういうつてもですね、さとりさん……怖……

待てよ？なぜ此処まで恐怖心を煽られるんだ……？

確かに、怖い話にはなるが……私には無害だ、怖がるのは紅魔館姉妹
の二人だけだ……

……何故気が付かなかつたんだ……！恐怖心を煽り、自壊させる絶
対的な闇の力……

テラーのメモリ……！

しかし、一体誰が……？とりあえず、この場から離れなければ

「皆さん、落ち着いてください、これはドーパントの仕業ですよ」

「うわあああああ……あのナイフ……！……咲夜の……！……レミリア

「ぱぱぱぱ馬鹿を言つんぢやない、ユリコアちゃん…そんな事が…！」咲夜ちゃんのだ…！」霧彦

「な…なんでだろう、凄いゾクゾクする…」フランドール

「感じる…感じるわ…！すぐそばに…奴の氣配が…！」慧音

「…」の威圧感…一体…！？」妹紅

「ゅゅゅゅ幽々子様帰りましょう、帰りましょうよ、もう現世なんて「ゴリゴリですよ！」妖夢

「あら妖夢、今、ゆ、つて何回言つたかしら？」幽々子

「」の恐怖感…まさか…靈夢さんでも近くに…」文

「…ハツ！ね、寝て無いですよ…？ねてませ…」…」桜

「…」…ろ、六本木！」空

落ち着け、最後の二人以外落ち着け、動物は規則通りな生活しか出来ませんからねえ…

「…ああ、もう落ち着いて…これはドーパントの仕業で…」

「そーなのかー？」

！？

即座に地面に青い泥のよつた物が溢れ出し、中から絶対的な闇の持ち主…テラー…いや、田が真つ青になつたルーミア君が現れる…犯人は…奴か！

なら、解決したも同然だ

「…ルーミア君、そのメモリを此方に渡しなさい」

「メリットはあるのかー？」

「鍋しましょ、鍋」

「わはー」

よし、後は取るだけ…テラーフィールドは収まつている、一応ウエザーに変身し、近づく…

「さあ、渡してください」

「分かつた…とでも言つと？」

直後、テラーフィールドが広がり、私は飲み込まれる、即座に恐怖感が増加し、心臓がショックで止まりそうになる

感が増加し、心臓がショックで止まりそうになる

「……？」

「悪いけど、何時もほど呆けてはいないわよ、テラーを使っているから」

まさか……？テラーのメモリを使用した事で……お札の封印が弱まつたのか……？

まあ、どうせ死ないので……別に怖くないですけど……？

全くテラーフィールドの効果が無くなつた……

そうか……！！

私は、絶対に死はない……死への恐怖が消滅＝私に死以外の恐怖は無い＝恐怖の増幅も無いため、ノーダメージ

あれ？案外テラーって弱……

つてか、この世界では弱……

テラー要らなくね！？

ウェザーのが強……

「テラーのメモリ……さよなら、私の青春」

直後にルーミア君の胸倉を掴み、マウントポジションを取り、殴り続ける

「ちょ、痛つ痛いつて！や、やめろお……！」

「私はつ！貴女がメモリを排出するまでつ！殴るのをつ……やめないつ！！」

……この後、ルーミア君からテラーのメモリを奪い、

妹紅君に何回も謝り、何とか和解して……

とりあえず、安心して眠れるだけの状況を作りました……

ああ、やっぱりなれない事はするものじやない、……明日からもガイアメモリの研究に没頭しよう、そうしよう

百物語2（後書き）

なんか変なの来たー！

ああ、このチクチクがたまらないっ！！

：井坂先生、私の思った通りの人：

空を打ち抜くQ／今、絶望の中で（前書き）

ちょ、ジュエルさん、かなりチートな能力つすね… 井坂先生が欲しがりそ…

『特色／力：ダイアモンドの身体故の比類なき防御能力。人間を宝石化。ダイアモンドミストによる鏡像生成能力』

それに、なんかゼットンファイナルビーク的な事もやつてましたしひ・何コイツ、ゼットン？ゼットンですか？唯一ウルトラマンを倒したゼットン？

つてか、特撮物つて基本的にカウンター系の能力が強いですよね

空を打ち抜くQ／今、絶望の中で

幻想郷、そこには多くの妖怪、神、妖精…など色々と人外が住み付いている

その所為もあつてか、妖怪に全く恐れを抱かない人類が増えた、と
いうより、無害な妖怪は人類と殆ど同じ、という考えが普通になつて来ているのだ

一見友好的なように見えるが…これは一部の妖怪にはストレスの原因になっている

妖怪の中には人を驚かせる事に生き甲斐を感じる妖怪もいる訳で…
人が驚かないどうやって驚かせるか考える、結局は投げ槍になつて…暴力に至る

最近までは驚かせるだけで無害だつた妖怪も凶暴化し始めている、
おお怖い怖い

からかさお化けの多々良たた小傘ら こがさもその内の一人だ

この間なんて、驚かせようとしたら逆に襲われたなんて事もあつた
(ちなみに、その男性は傘で殴られ井坂医院に運送された)

尚、この男性は

『あいつが悪い！妖怪の癖にオッドアイで素足で下駄でいきなり後ろからうらめしや～とか言われたら堪らないって…何…？馬鹿馬鹿しいだと…！？お前に！お前に何が分かるんだ！？あいつはな…！小傘はな…！俺の母親になつてくれるかも知れない女なんだよ！…』

と言つ言葉を残し、井坂医院を去つて行つた…

まあ、それはどうでもいい話だつ、尚、男の名前は…草加まま…
ゲフンゲフン

「絶望した！全く驚かない人間達に絶望したあーッ…！」

傘を振り回しながら半泣きで叫ぶ妖怪が居た、上記の小傘だ

「…もう、人間じゃなくて鬼とか、もつと低レベルな奴ら驚かそ
かなか…」

怒りのあまり思考回路の低下が進んでいる

「…？ そうか…私には…人に話を聞けるという利点がある…何が怖
いか聞けば…あるいは…！」

良い様に利用されそうな妖怪である

そこで、彼女はとりあえず片っ端から人間に声を掛ける事にした、
まず最初に…最近怖がられている妖怪についてだ

『え？ 最近怖がられている妖怪…？ そうだねえ…やっぱり『化け鳥』
かな…なんでも、樹齢が結構ありそうな大木ほどもある首を持つて
いて、翼はお天道様を包みこむほど大きいらしいよ…』

10人中8人がこう答えた…

で、小傘はこの事に興味を持ったので見かけられる場所を聞いた
すると…

『何でも…博麗神社から見えるらしいよ、ちょうど、お天道様が一
番高く上がる時間にお天道様に重なるように…』

彼女は立ち上がる、自分の威儀を取り戻すために…

「私はもう小傘ではない…エリート小傘だ！」

その台詞が堂々と言える口まで…

頑張れ小傘！

諦めるな小傘！

君の戦いは此処からだ！

（井坂）

「化け鳥？」

「そうですよ、なんか天人の人達がですねえ、暴走した大天狗だ、
つていちゃもん付けて来るんですね、なんでも、天界の周りを飛
びまわっては、ちょくちょく攻撃を仕掛けているらしくて…

…大型で鳥型で、強力な妖怪…

相当な樹齢の大木ほどもある首..

明らかにケツァルコアトルスですよねえ..

しかし、私が試験体を観察した時は..そこまでの力は無かつたはずですけどねえ..

天人、というのも妖怪でしょうし..普通に撃退できるはずなんだけど..

あ、でも..空君は不正アクセスでしたね、彼女のコネクタはアームド専用でした..

つまり、ケツァルコアトルスの正式適合者..

ってか、空君、非売品って言つてましたねえ.....そうか..
正式適合者は空君に最初、ケツァルコアトルスを渡し、効果を見た
そして、効果が分かり、自分に使用した..という事か..
一体..誰が..?まあ、いいです..ケツァルコアトルス、あれさえ手
に入れれば私は飛行能力を身に付ける..

全員飛んでいるのに一人だけ走るなんて事は無くなる..!!.
よつしゃ、何故か楽しくなつてきましたねえ

「井坂先生? 何処に?」

「少し..バードウォッチングに..ね?」

私は気合を入れ、ドアを開ける

「お賽銭、来て無いわよ」

借金(厳密には違うが)取りが居た..というより靈夢君

「ええ..今、凄い盛り上がりつてたのに..ああ、もう..文君が持つて
ますから、文君から渡してもらつてください..今月は25万と8千
です..」

靈夢君.....ね?.....空氣読みましょ'うよ...?

空気を打ち抜く今、絶壁の中で（後書き）

空気は読むものじゃない、吸つものだ！

空を打ち抜くQ／アダムと井坂（前書き）

私は帰つてきましたよおおおーッ！――！

あ、後、今回の話、内容が異常に薄いですが…
久しぶりすぎてどういう構成の話か忘れてしまったんですよ、申し訳無い

お詫びにこの話には次の話のメインとなるアダムの解説を加え、
連続で次の話を更新します

空を打ち抜くQ／アダムと井坂

ええと、落ち着いて聞いてほしい…

うん、来たんですよ…博麗神社

んで、ケツァルコアトルスのメモリを持った空君を見つけた訳で…

「何やつてるんですか…」

「うわっ！井坂先生か…」

「まさか君が犯人だつたとは…事情を話してください」

「え…あーいや、なんか…ファーストプランの…〇・〇三が…ケツア

ルコアトルスを拾つてですね…」

「あ、アダムか…」

見分けが付かない…紛らわしい

「それで…誰か適応できる人物は居ないかと…探してるんですよ

「それで、誰も制御できず、暴れまわると…」

「そうです」

「よし、じつにメモリを渡そつか」

素直に渡すとは…

「あ、はい、神の命令は絶対です」

思つてましたよ、最初から

「え…ええ？いいんですか…それで…」

「いいんですよ、これで…」

直後にアダムは飛び立つて帰つて行く…

え？…

何これ…

スッキリしな…

ええ…？

U-01～U-03までがファーストプランと呼ばれており、

U-01は十六夜咲夜から時を操る程度の能力をラーニングし、アダム達の樂園、ラプチャヤーを作るだけの機械と化した

U-02は自己発展型で「適切な処置を取る程度の能力」を手に入れ、ラプチャヤーの政治を行つている

U-03はナズーリンから探し物を探し当てる程度の能力をラーニングし、ちよくちよくメモリを拾つている

U-04～U-020はオリジナルと呼ばれ、靈を媒体とし、永遠の命を手に入れている

U-20～は彼女達が独自に開発を進めた結果、辿り着いた子孫を増やす方法の結果である

数々の薬物とオリジナルの単細胞を媒体として作成されたため、平均寿命は500年程と言わわれている

ちなみに老化現象は起こらず、基本的に寝たら死んだ、という感じである

更に、彼女達は全員が姉妹であり、彼女であるために、一人にでも牙を向いた相手には全員で掛かる

一人に石を投げられたら一人で投げ、の考え方である…が、排他的ではなく、むしろ交流を盛んに行うタイプである、時折妖怪の山などに挨拶をして、提供を結ぼうとしているが、山の神が反論している神からすれば、クローンというのは禁断の区域なのだろう
尚、ファーストプラン、オリジナルは靈鳥路空と同じように「核融合を操る程度の能力」である

しかしセカンド（U-20～）は若干能力が低下しており、「核を探知する程度の能力」へと変化している
だが、その代わり飛行訓練を受けており、かなりの回避力を持つ一種のスポーツとして、発展した

空中で行うラグビーのようなものが流行っている
ザナルカンドエイブスとかは関係無い

ちなみに、年中開放しており、一部の人間にラブチャ―は人気のスポットとなつてゐる

同じ顔が沢山ある事に慣れれば未知の科学力に触れられるからである（無重力部屋など）

しかし、科学を目的に来た者は門前払いである、楽しむ為に来た人間などは無料で招待する

料理も上手いらしい

たまに彼女達に恋心を抱く者が居るが…

結ばれたケースは無い

というより、彼女達は大きな家族の中で育つてしまつたために、愛、といつても「家族愛」しかなく、性的欲求などは完璧に無くなつてゐる

無理にでもやるうとすれば、消される

その程度なのである、彼女達は

ちよ、本編何行だよ…

と、思った方は…

前回と続いていて、前回と一緒にシートで一話と書いてください

お願いします…

▲の氣まぐれ／哀れな哀れな巫女さん（前書き）

れいじゅーさんって、こんな感じだと思つんだ…
涙が止まらない

Aの氣まぐれ／哀れな哀れな巫女さん

俺は、いや、俺達は本当に存在しているのだろうか？

別に誕生の瞬間に感激が起こるわけでもなく
ボタン一つで次々に量産されていく

寿命は五百年、最初の二十年は楽しいが、その後も続く楽しみを見
つけられなきや辛い人生だ

俺は見つけられなかつた

だから夜道をフラフラと歩いてるんだ

何か面白い物でもないかな～っと歩いてたら…

全く面白くない物を見つけた

首に縄を掛け、今にも自殺しようとしている人間だ

俺はああいうのを見るたびに思う、馬鹿だと
多くて百年しか生きられないのに、なぜ楽しむ事ができないのだ、と
それしかない人生に何故飽きるのか

馬鹿馬鹿しい

「おい、お前！何やつてんだ！」

俺は即座に飛び立ち、人間を縄から遠ざける

顔は…かなりいい方だ、可愛い

姿は、腋部分が無い巫女服で、

白と青色

髪は緑色で、左側に白い蛇のような物で纏めてる

関わつたら不味いタイプだつたか…！

こういう奇抜な外見の奴は妖怪か神か、どちらにしろ人外だ

「えー…あー…うん、早まるな、話を聞いてやるから」

しかも彼女、目に光が全く無いし、動きもしないから…

相当だ…

うつわ、まずつた

「な、話してみろ、俺に、うん、向こうにさ調度いいベンチあるし

少女達移動中…

…

…気まずい、異常に気まずい

マジで気まずい

誰か助けて、苦手なんだ、いつにいつ空氣

だつて、俺達つて喋らない時間が無いぐらいだからさ…

「……神社の参拝者が少なくなつたのが事の始まりだつたんです…」

始まつても暗い話だし…

まあ、乗りかかった船だ…最後まで付き合つた

「ああ、それで？」

「……色々と努力しましたが…全く成果が出ず、軽いノイローゼに掛かつたんです」

…成る程、真面目な人間によくあるパターンだな…
人間には余裕が無い、寿命が短い所為か、いつでも焦つている
だから「時は金なり」なんて言葉もできる

「…それで？それが理由じやないんだろ？」

「……はい、そんな時にある人に言われたんです、『体を売れば参拝者が増える』と

うつわ、もうやだ、鬱一法通行じやないか…これ…

「…で、売つたのか？」

「……はい、最初は嫌だつたんですが…本当に参拝者が増えて、信仰も集まつて、ありがとうつて言われて…」

マジで嫌だわ…こういう話苦手なんだよね…

「…でも、最近信仰が全然増えなくて…」

「…体目的の参拝者しか居なくなつたんだな…」

「それで…これ以上私が居ると神社が腐敗してしまつ…」

「あはは…神に身を捧げた身なのに…体を売るつて…何やつてんだ

それで、自殺に至つた訳か…身勝手だな

ろ……私つてなつて……」

「ああもつ、イライラする……」

「大馬鹿者、だな」

「ですよね……」

「んで、どうするんだ?」これから……」

「もう神社にも帰れませんし……」

「だろうな、帰れる筈が無い

「そもそも帰る資格がありません、私には」

「じゃあいい、しばらく俺んちで過ごせ」

「えつ……?」

「んで、落ち着いたのと覚悟が出来たら帰れ

「でも……」

「あー!グジュグジュうつさいなあ!来い!」

そういうつて俺は彼女の腕を掴んで無理矢理家まで連れて行く
まあ、同性同士だし、問題なしでしょ

少女達移動中……

「ほら、ここが俺の家だ」

「といつても、寮みたいな物だけな……」

「……ラブチャ―の人だつたんですか」

「……あ、何処かで見た事あると思つたら……山の神社の巫女か!」

「まさら気が付いた……」

まあいいか、乗り込みすぎた船だ、最後まで付いていくさ

「まあいいや、ここが俺の部屋だ、とりあえず入れよ」

「おいおいー!」-753が部屋に女を連れ込んだぞ!-

「マジか!遂に恋愛感情を持つた奴が現れたのか……」

「つるつせーよーお前等!寝ろ!」

まあ、確かに奇行だろうな、こんな事……

「お邪魔します……」

彼女も大分落ち着いたようで、割と軽い足取りで部屋に入る

まあ、部屋と行つても、テーブルと椅子が置いてあり、風呂場に続く扉と、キッチンがあるだけだが…

「意外と綺麗なんですね…」

「なんだそれは、まるで俺が部屋を汚していくとも思つてていたような台詞だな…」

「いや…だつて…男口調ですし…」

「ああ、これが、これは気にしないでくれ、俺達、アダムつて種族にはこの口調しか広められてないんだ…よければ女言葉というのを教えてくれ…」

「ええとですね、なるべく濁音を語尾に付けないとそれっぽいです」「い…こんな感じか?」

「あ、あと「か」も付けないほうが…付けるなら、更に次に「な」も付けるといい感じです、又はこんな感じ、の「ん」を「う」に変えてそこで終わらせてもそれっぽいです」

手厳しい、超手厳しい

「い…こんな感じかな…?」

「あ、そんな感じです、可愛いですよ」

ちょ…口調変えただけで可愛いって…

照れるじゃないか…

じゃなくて、照れるじゃない…か

こりや、面白い物を見つけたかも…

「なあ」

「ねえ、と書つて下せー」

本当に手厳しい!

「ねえ、～しれないな、とかの場合どうすれば…?」

「な、を「わね」に変えるとそれっぽいです

「ありがとう、参考になる…」

「なる、の後に「わ」か「よ」を付けるとそれっぽいです、わ、だと若干大人っぽく、よ、だと若干子供っぽいイメージです

「イツ、本当にさつきまで自殺を考えてた人か？」

「ん、この場合どうすれば…」

「ねえ、うんか？、見たいな場合はどうすれば…？」

「か、を「なの」に変えればそれっぽいです」

成る程、いい勉強になるわね

んん、大分馴染んできたわね、後で広めようか

「これもおかしいな…」

「広めようか、とかいう場合は？」

「か、の後に「しら」と付けるとそれっぽいですよ」

「ありがとう、本当に勉強になるわ…」

明日広めよう、大革命ね、これは…」

△の氣まぐれ／哀れな哀れな巫女さん（後書き）

あれ……？あ、読む小説間違えてませんよ、ハイ、あつてます
ただ、私の中で、アダムメイン話を作ろう、という事が決定したの
で：
ご安心を、次の次からは井坂先生の再臨です
申し訳ありません、このような「コミ」小説で
読者様！お許しください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0453m/>

東方変態医者

2010年10月11日03時18分発行